クレッシェンテ短編集

高里奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クレッシェンテ短編集

【Ｎコード】
Ｎ３０９８Ｗ

【作者名】
高里奏

【あらすじ】
クレッシェンテの様々な出来事の短編やお題攻略。
藍蔑離紅及び、旧ブログからの移転も含みます。

これこそが運命の出逢い。（前書き）

この章から第十章まで以下のお題を使用させていただいています。
使用お題。

運命的な恋に１０のお題
● これこそが運命出逢い。
● 全てが止まってしまう時間。
● 恋をするために生まれてきた。
● 貴方は今誰を想っている？
● 逢えない時間寂しくてたまらない。
● 何をしたら笑ってくれるだろう。
● 一緒に出かけるチャンスを逃さず。
● この鼓動は治まることを知らない。
● 一歩進みたいから貴方に言うのだ。
● 「今から言うこと絶対に嘘じゃないから」

配布元：「Ａｂａｎｄｏｎ」
ＵＲＬ：ｈｔｔｐ：／／ｈａｒｕｋａ．ｓａｉｉｎ．ｎｅｔ／~ｔｉｔｌｅ／０／

また、この短編集の中には深刻なネタバレ（と言うほど重要でもないかもしれませんが）本編では書いていないこと、これから書く予定のことも含まれています。
ネタバレは絶対に許せないという方は本編をご覧になってからお読みください。
作り的には短編のみでもお楽しみいただけるかと思います。

これこそが運命の出逢い。

『アラストル・マングスタね？　その命、頂戴』

『悪いが簡単にはやれねぇな……』

思えばある意味運命的な出会いなのかもしれない。
尤も、俺とこいつの間に、ロマンスとかそういった甘ったるいものは無い。
それどころか、宿敵だとかそう言った類のものですらないのだ。

一言で言うならば【奇妙】

俺と玻璃の関係は【奇妙】な関係でしかないのだ。

「運命の出会いねぇ…お前、意外とそういった甘ったるい考えも持ってるんだな」
「甘ったるい？　別に人と会っても甘いもの無いよ？」

本を開きながら足をばたばたと動かしている玻璃に「運命の出会い」とやらのことを訊かれ、戸惑う。
丁度昨日見た映画がそんな感じの内容だった気がする。
まさかついさっきまでそんなことを考えていたなんて悟られたくない。
そう考えていたら、玻璃は意味が解っていなかったらしい。

「まだまだガキだな」
「煩い。三十路」
まただ。
玻璃に「ガキ」というと必ず「三十路」と返される。
事実だから仕方ねぇとは思いつつもやはり痛い。

「なんでそんなこと訊いた？」
これ以上言われないためにも話題を戻す。
「蘭がなんか言ってた。運命の出会いがどうとか、未来への影響がどうとか…」
随分曖昧だな……。
玻璃が興味の無いことを覚えていられるはずも無いが……。

「蘭が言ってた。人と人が出会うのは前世からずっと決まってる運命なんだって」
「ほぉ」
「兄弟とか家族に生まれるのは前世でもずっとそういう繋がりがあるからだって」
「そうか」
また随分スピリチュアルな話だな。
まぁ、俺には関係の無い分野だ。
「女ってのはそういうのが好きだな」
「別に…でも、朔夜は前世の記憶が少し残ってるとか言ってたよ」

「ほぉ…で？」
「なに？」
「詳しい話は無いのか？」
中途半端に言われると気になるだろ。
「神にお仕えする人だったんだって」
「……今とかわらねぇなぁ…」
「うん」
期待した俺が馬鹿だった。
もう少し童話風な何かが登場すると思ったのだが…。
「あ、蘭が言ってた。私と瑠璃は前世で恋人だったんだって」
「はぁ？」
女同士だろ。とは思ったが、前世とやらでは性別や人種も違うことがあると聞く。
まぁ、今の瑠璃の妹にデレデレのところを見ると否定できねぇな。
「なんかね」
「ん？」
「アラストルにも会ったことある気がする」
玻璃が真剣に言う。

「馬鹿か。お前が俺に会ったことある気がするのはシルバに似てるからだろ？」
「…違う」
「はぁ？」
散々シルバに似てると言っていた奴が何を言ってる？
「アラストル」
「何だ？」
玻璃がじぃっと俺を見る。

「人はね。出会うことに意味があるんだってシルバが言ってた」
「まぁ、そりゃあな……すれ違う相手にもすれ違うことに意味があ

るとか言うしな…」
もっとも、そういうことを言うのは大抵術師や魔術を齧ったことのある連中だ。
「アラストルに会ったのも意味があることだよね？」
「ああ、そうだな」
確かに、玻璃との出会いは俺の人生に大きな影響を与えている。
「こういうの、運命って言うのかな？」
「さぁな」
玻璃が聞きたかったのは甘ったるいロマンス映画のような【運命】ではなく、もっと前世とか縁とかそういった類の【運命】だったらしい。

「じゃあ、アラストルも運命の人だ」
玻璃は少しだけ柔らかく微笑んだ。
どうも、玻璃が笑うのには弱い。
特に柔らかく笑うと妙にリリアンに似ている。
それで居て玻璃は玻璃だと感じさせるのだ。
神が居るのなら問いたい。
なぜ玻璃と俺を出会わせたのか。
なぜどちらにも似た知り合いが居るのか。
そんなことを考えながらコーヒーを飲んでいると、玻璃は床に伏して眠ってしまっていた。

「おい…せめて長椅子で寝ろ」
そう言っても起きる気配は無い。
仕方なく抱き上げて長椅子に寝かせると、先程まで玻璃が読んでいた本が目に入った。

「……『運命の赤い糸』？」
どうやら最近流行っているロマンス小説らしい。
栞代わりにカードが挟まっている。

【たまにはこういうのも悪くないわよ？】

上品な文字は彼女の長姉、朔夜の文字だろう。

「……まさか、な？」
玻璃に限ってそんなことは無いだろう。

本をテーブルに置き、玻璃に掛ける毛布を取りにいく。

『ほら、これでも着てろ。かなり濡れてるかもしれねぇが無いよりはマシだろ…』

拾ってしまったのは、気まぐれだった。

その気まぐれを運命と呼ぶのだろうか？

全てが止まってしまう瞬間。（前書き）

クレッシェンテ語講座？
「ラウレル」＝「病院」

全てが止まってしまう瞬間。

どうして突然消えてしまったの？
手のひらの温もりはもう、薄れてしまったの……。

「朔夜、ごめん」
「謝らないで。ヴァレフォール」
朔夜の頬を涙が伝う。
「泣かないでよ」
「ええ」
頬に触れた優しい手が温かい。
ヴァレフォール・ルーポはクレッシェンテでは少しばかり名の知れた魔術師であった。
空色の髪と瞳を持つ彼は今、床に伏している。
「大丈夫、明日にはまた仕事に戻れる」
「でも…」
「朔夜が笑ってくれたらもっと早く元気になれると思うよ」
そう言って笑ったのはヴァレフォール。
「まぁ、ヴァレフォールったら」
朔夜もつられて笑う。

だけども、朔夜は知っていた。
もう、ヴァレフォールの命は長くないと。

「朔夜、そろそろ戻りなよ。君の怖いボスが待ってるよ」
「あら？貴方のボスはどうなの？」

「ディアーナの幹部を部屋に入れるなってかんかんだったよ。この前も。まぁ、知ったことじゃないけどね」
彼がおどけて笑うと、朔夜は困ったように笑う。
「ヴァレフォール」
「なんだい？」
「どうしてディアーナとハデスは相容れないのかしら」
朔夜が言うと、ヴァレフォールは微かに俯く。
「知らない。僕には関係の無い話だ。ボスがそうだから部下は従う。それだけだよ。僕個人としては君個人のことは嫌いじゃない。だけども、ハデス幹部としてはディアーナ幹部との接触は極力避けなければならない」
「……そう、ね…今日はもう戻るわ」
「ああ、それと、もう来ちゃだめだよ」
「……ええ。解ったわ」

今日はたまたま、雨の中倒れたヴァレフォールを連れてきただけだった。

「ディアーナとハデス…月の女神と冥府の神は相容れないのかしら？」
朔夜は呟く。
この神の居ない国クレッシェンテで神の名を持つ二つの組織。やることはどちらも同じ。だけども、マスター、セシリオ・アゲロはルシファーとは相当相性が悪いらしい。そう聞くと胸が痛い。
「争いは…終わらないのかしら」
朔夜はヴァレフォールを想う。
彼はいつだって、『ディアーナ幹部』ではなく『朔夜』として扱ってくれた。

初めて大聖堂で出逢ったあの日から、ずっと。

闇だけしか作り出せないのはこの名前のせいなの？
人を殺めることに慣れすぎてしまったのも、みんなみんなこの名のせい？

「朔夜」
「はい」
「仕事です」
「はい。本日はどのような？」
久しぶりに回ってきた仕事に朔夜は嫌な予感がしていた。
「この男を、殺してください。ただ殺すのではなく、殺した証拠に首を持ち帰れというのが依頼主の要望です」
「はぁ…どのような人ですか？」
「ハデスの幹部らしいですよ。なんでも魔術師まがいの詐欺師だとかでかなりの損害を出された恨みで殺してほしいとの事です。まぁ、そんな事情は僕にはどうでもいいのですがね」
「解りました」
朔夜は資料の入った封筒をセシリオから受け取る。
部屋に戻り中を見て、朔夜は後悔した。

朔の月と恋の行方が重なった

「朔夜、いや、レオーネか。ついに僕を殺しにきたってわけ？」
「ええ、上に逆らえないのはお互い様でしょう？」
「ああ。そうだね。僕も、全力で戦わせてもらうよ」

朔夜が乗っていたライオンを見て、彼はすぐに気がついたのだろう。
「私は…貴方とは戦いたくなかった」
「……今更それは無しだ。決意が揺らぐといけない」
ヴァレフォールの言葉に朔夜は泣きたくなった。
「ごめんなさい……マモン、お行き」
マモンと呼ばれたライオンは、いつもとは違う主の声に少しばかり戸惑いながらも命令には従う。
「君は、直接戦わないのが弱点だ。眠りなさい」
彼がライオンの額に触れてそういうと、ライオンはその場に倒れこむ。
「……やる気が無いなら、僕からやろう……幻影香、毒蝶」
「幻影香……随分良いもの持ってたのね」

「ああ、伝があるんだ」
香は風に乗って朔夜の方へ来る。
名の通り、幻覚を見せる香。
ただ、その幻覚は術者が自在に操れる。
「私も…魔術師の弟子ですから…」
朔夜がマントを翻し、香を飛ばす。
「……このまま負けたことにして帰れればどんなにいいか…」
「今更それは無しだよ。どちらかが死に、どちらかが生きる。この国はそういう場所だ」
「ええ…」
朔夜は鞭を握る。
「君が来ないなら僕から行くよ？」
そう言って彼もナイフを構えるが、一向に攻撃をしてくる気配は無い。

そのまま、どれほどの時間向かい合ったか。

雨が降りしきるそこで、ずぶ濡れになったまま、二人は向き合っていた。

「やっぱり、僕に君は殺せないみたいだ…」
「…どうして？」
「……僕は一度、君に助けられている」
それは出逢ったあの時のことだろうか…
朔夜は涙を流す。雨に隠れることを願いながら。
「…私も……殺せません…貴方だけは……」
武器を握っても、身体は動かない。

人より少しばかり人殺しが得意だからこの国で生き延びられたと

いうのに、目の前の人物の前では途端に無力になってしまう…。

「朔夜、ごめん」

「謝らないで、ヴァレフォール」

「朔夜、逃げろ。今すぐどこか遠くに。とにかくここから離れるんだ」

「どうして？」

朔夜はなりふり構わず泣きじゃくる。

「いいから、走れ！」

そう叫んでヴァレフォールは朔夜を突き飛ばした。

その刹那、銃声が響く。

時間が止まった気がした。

その瞬間、全てがスローモーションで、何か衝撃を受けたヴァレフォールがゆっくりと重力に負け地面に叩きつけられ、水滴が跳ねた。

「ヴァレフォール……」

朔夜は慌てて駆け寄る。

何が起こったか理解できなかった。

「朔夜…逃げろ……リヴォルタだ……あいつらは無差別攻撃を仕掛けてくる…君も…危ない…」
「ヴァレフォール…嫌よ！　そんなこと出来ないわ。早く手当てしなくちゃ！　すぐにラウレルに……」
「ダメだ…僕は今日死ぬ運命だった。はじめから決まっていた…だけど……君の手を汚させずに済んで本当に良かった……」
それだけが気になっていたんだと彼は告げる。

「朔夜、ごめん」
「…謝らないで…謝らないでよ！！」

朔夜が叫んでも、既にヴァレフォールには届かなかった。

貴方が居ない私の胸は哀しみしか通らない。

もう、何も要らない。

だから…心をそっと凍らせましょう。

身体ごと持ち替えるとセシリオは「首だけで良かったんですよ？」と告げたが、朔夜の耳にはそれさえも入らなかった。
時間も心も全てが停止したようで、それで居ていまだに呼吸を続けている自分をなんとも醜いと感じた。

「朔夜？」
「……あとはお願いしても？」
「ええ」
「……少し、疲れました」
朔夜が告げると、セシリオは「ああ、仮にもハデスの幹部ですからね」とだけ答え、退室を許可した。

もう、逢えない…。
私が殺してしまった…。

焼けるような痛みが全身を襲う。

幻で良い。
もう一度貴方に会いたい…。
せめて…。
想いを告げられてたら…。

後悔が朔夜を襲う。
ただ、止め処なく涙が流れた。

恋をするために生まれてきた。

上司が要らないと言って押し付けてきたチケット。
なんとなく、無駄にするのももったいない気がして、休暇を使って観ることにした。
けれども、すぐにそうした事を後悔した。

「……何が哀しくて勤務時間外に一人でこんなものを見なきゃならんのだ」
ミカエラはため息を吐いた。
ユリウスめ、貴様の実家に腐った烏賊でも送ってやろう。
あ、あいつは既に家族が存在しないのだった。
などと考えながらミカエラは心の中で上司の悪口を言い続ける。

彼女の上司が押し付けたのはロマンス映画のチケット。

生憎、ミカエラ・カァーネという女性は甘ったるいロマンスとは無縁の人間だった。
「恋をするために生まれてきた」などとほざく人間は邪魔者以外の何者でも無いと彼女は感じていた。

「全く…騎士団長殿は何を考えているのか理解できん」
なぜ自分にこんなにもくだらない映画のチケットを渡したのか。
甘ったるいロマンスなどは宮廷騎士団長ユリウスのイメージには全く合わないし、もちろん自分にも似合わないとミカエラは考える。
「…嫌がらせか」
結論はすぐに出た。
彼とてこんな映画を観る趣味は無いはずだし、そもそもあの男に

大人しく座って何かを眺めているなどという芸当は出来ないはずだ。
折角の休暇を無駄に使ってしまった。
折角外にでたのだから焼きたてのベーグルでも買って帰ろうかと
ミカエラは馴染みのパン屋へと向かう。

「げ…」
「お前は…」

パン屋に入った瞬間、嫌な相手に会ってしまったと思った。
「…ヴェント、なぜ貴様がここに……」
「悪いかよ。ただの使いだ」
「貴様が？」
「仕方ねぇだろ？　マスターがここのベーグル食いたいと駄々こねて大変なんだよ。ディアーナで一番足が速い私が買いに来ただけだ」
その言葉を聞いて、ミカエラは鼻で笑う。
「よくそんな上司の下で働けるな」
「全くだ。早く転職してぇよ」
彼女のその言葉に、ミカエラは笑みがこぼれた。
「貴様がディアーナに飽きたら私のところに来い。使ってやらんこともない」
貴様ほどの実力者ならすぐに昇進できる。
そう告げると、彼女はにやりと笑う。
「悪いが、一箇所に留まるのは苦手なんだ」
それだけ言って、彼女はまさに風のように駆けていった。

「全く、慌しい奴だな」
笑みがこぼれる。
ベーグルとコーヒーを買ってミカエラは職場兼自室である看守長室へと戻ることにした。

「ミカエラ、今日は出かけていたのですか？」
「ああ、休暇だったからな」
「ふふっ、外の臭いがしますよ」
「そうか。貴様は、鼻は利くのだな」
ミカエラは看守長室のすぐ傍の牢で拘束されている男に話しかけられ、少し笑いながら答える。
「ああ、噴水広場前のあの店ですね。他の店とは微かに違う小麦の臭いがします」
「…貴様は犬か」
「犬は貴女でしょう？　ビアンコ・カァーネ」
ミカエラは呆れ、ため息が出た。
「貴様と私では意味が違う」
「ええ、知っていますよ。それで？　外はどうでした？　少しでいいので話を聞かせてください」
ここに捕らえられて二週間。檻の中の男は外の話を聞きたがる。
完全なる拘束をされ、光さえ目にすることの出来ないその男にとってミカエラの声のみが情報源だった。
「そうだな。騎士団長殿に頂いたチケットでくだらないロマンス映画を観て来た。その跡に貴様が先ほど言っていたパン屋でヴェントに会った、そして、ベーグルとコーヒーを買って帰ってきた。それだけだ」
「映画、ですか」
少しばかり不思議そうな声色だ。
「私が映画を観てはおかしいか？」
「いえ、少し意外だっただけです」
そういう男にミカエラは少しばかり苛立つ。

「それで？　どんな映画でした？」
「くだらなかった。男が『君に恋するために生まれてきた』などというなんともありがちなくどき文句を言う甘ったるいロマンス映画だった。まぁ、女優はなかなかの美人だったがな」
「貴女の話はいつもそうだ。見た女性の感想が入る」
「悪いか？」
「いえ、そんな貴女も嫌いではありませんよ」
マスクに覆われていて見えないが、おそらくはこの男は笑っているとミカエラは思った。
「私は寝る。見張りは四人つけよう。話し相手はそいつらに頼むんだな」
「おやおや、貴女意外は僕に話しかけようとすらしませんよ」
「だったら一人退屈な闇の中で過ごせ」
それだけ言ってミカエラは部屋に篭る。

あの男と長く話すのは良くない。
それはミカエラが良く知っていることだった。
目を見てもいけない。
すぐに幻術をかけられ惑わされる。
特にあいつは人を騙すことにかけてはクレッシェンテ一を誇る。

ミカエラは深いため息を吐いた。

甘ったるいロマンスなんてくだらない。
このクレッシェンテに生まれるのは『恋』なんかのためじゃない。
この国で生きるのは、この国に生まれるのは戦うためだ。

くだらないロマンスは捨ててしまえ。
ミカエラはベッドに腰掛け、靴を脱ぎ捨てる。

「今日は時間を無駄にしたな」
明日あの上司に文句を言おう。

ミカエラは強く心に誓った。

貴方は今誰を想っている？

貴方の目に……。
私は映っていますか？

アラストルと居るのは嫌いじゃない。
むしろ好きだと玻璃は思っている。
今日だってアラストルの部屋に行ったら、お菓子くれたし、絵本まで用意してくれていた。
仕事があるから暇ならそれでも読んでいろということらしい。
「アラストル」
「何だ？」
「時の魔女、絵本にまでなってるんだね」
「ああ。昔からだ」
アラストルの言う『昔からだ』という言葉を玻璃は嫌いだった。
「どうせ、リリアンが好きだった、でしょ？」
「…ああ」
私はリリアンじゃない。
そう言いたいのに、なかなか言えない。
アラストルをシルバだと思い込みたかった自分が居るように、アラストルも自分をリリアンだと思い込みたいのは痛いほど解る。
そう、表面上は『アラストル』という個人としてみているけれど、心のどこかでは『シルバ』としてみてしまうんだ。
そう思うと玻璃は哀しくなった。

シルバが私をリリアンと呼ぶ……。

それは悪夢のようだ。
だけど、今目の前に居るのはアラストルであってシルバではない。
「…つまらない御伽噺。蘭に直接話を聞いたほうが楽しい」
「そうかぁ？　けど、絵は悪くねぇだろ？」
水彩タッチの淡い絵。
確かにアラストルにしては趣味は悪くないと思う。
だけどもこの絵は嫌い。
「この絵本、嫌い」
「何でだ？」
「クロツグミが自ら首を切り落とそうとする場面が無いもの。時の魔女は言ってたよ。絵本じゃ本人たちの苦悩は伝わらないって」
ただの御伽噺になっちゃうって。
そう告げるとアラストルはため息を吐く。
「…文句が多いな。特に今日は」
何かあったのか？　と訊ねられる。
「別に…仕事も無くて暇なだけ」
今の状況をきっと『ニート』とかって言うんだ。
確か意味はダメ人間だっけ。
「お前のマスターに頼めばいくらでも仕事貰えるんじゃねぇのかぁ？」
お前たちには甘いからな。あの男はと言うアラストルに苛立つ。
「貰えないよ」

「そうか」
「…いい、ジルに遊んでもらってくる」
そう言って玻璃は窓枠に足を乗せる。
「おい、出るなら窓じゃなくて玄関から出ろ。危ねぇだろ？」
「危なくない。慣れてる」
そう言ってもアラストルは怪我するだの女なんだからだの言う。
「…私はリリアンじゃない」
思わず玻璃はそう言った。
「……悪い…つい、癖でな」
「…別に……」

こんなことを言いたかったわけじゃない。
玻璃は思う。
本当は今日はアラストルに新しく覚えた手品を見てもらおうと思っていた。
昨日描いた絵も見せようと思った。
だけど、そんなことはどうでもよくなった。

貴方は今、誰をその瞳に映してるの？

そう考えると、途端に怖くなって、アラストルが止めるのも聞かずに窓から飛び出した。

飛び出したはいいけど、行く当ても無かった。
生憎の雨。

こんな日はジルは絶対に外に出ない。
仕事があっても部下に押し付けてきっと部屋に篭って書類仕事をしてるんだ。
そんなことを考えながら、噴水の淵　によじ登って、玻璃はただ、雨に打たれた。

ここでリリアンが死んだんだ……。
シルバと一緒に……。

蘇る記憶。
小さな少女が真っ赤に染まったあの日、銀の剣士が一人消えた。
「シルバ……また、一人ぼっちかな…」
アラストルにあんなことを言っちゃったからもう、アラストルのところには戻れない。
それにマスターのところだって、今日はもう誰も居ないから戻れない。

どこに行ったらいいの？
玻璃は途端に怖くなった。

私には行き場が無い……。

「アラストル……」

自分の狭い交友関係に嫌気が差した。
頼れる人間がたったの三人しか居ないのだ。
いや、いざとなればリリムにも頼れる。
彼女の元へ行けば、柔らかいタオルと温かいココアを出してくれるのはすぐに想像がつく。
だけども玻璃は彼女の元へは行きたくなかった。
だってリリムは玻璃を『リリアン』と呼ぶから。

「みんなリリアン、リリアンって、私はリリアンじゃない…」
誰も『玻璃』を必要としない。
私は必要ないんだ。

恐怖が玻璃を包む。

このまま雨が私を消してくれればいいのにと玻璃は思った。

何時間雨に打たれただろうか。
もう既に、玻璃は時間どころか感覚すら失っていた。
このまま眠ったら噴水の中に落ちて溺れ死ぬんだろうななどとぼんやりと考えながら、ただただ、雨に打たれていた。

そんなときだ。

「玻璃！」

この声は誰だっただろう。
酷く懐かしい気がする。

「アラストル？」
違う。
アラストルが呼ぶはずが無い。
きっとこの声はシルバだ。
そう自分に言い聞かせたとき、強く抱きしめられる。
「馬鹿！　何やってるんだよ！　心配かけるな…」
衝撃に驚いて、少し遅れて見上げると、ずぶ濡れの銀髪があった。
そこで泣き出しそうな顔をしているのはシルバではなくアラストルだった。

「…ど……して？」
アラストルは来るはずない。
だって、『玻璃』は必要じゃないから……。
「ほら、帰るぞ」
そう言ってアラストルは玻璃を抱きかかえる。
「お前、捨て猫みたいだな」
「…アラストルも野良猫みたいだよ」

二人揃ってずぶ濡れでなにやってるんだろう……。

「風邪ひくぞぉ？」
「アラストルだって」

「お前とは鍛え方が違うんだよ」
彼は微かに笑うが、どこか怒っているような気がした。
「アラストル、怒ってる？」
「当然だ」
少し苛立った口調。
これはわざとだと玻璃は思った。
「俺は、いつ来ても良いとは言ったが、窓から飛び降りていいとも、雨の中ずぶ濡れになっていてもいいとも、心配かけていいとも言っていない。心配掛けるな。探しただろ…」
彼は早口に、そして力なく言った。
「……ごめんなさい…」
「いや……あまり心配掛けるな…禿げたらどうする」
その言葉に玻璃は思わず笑う。
「大丈夫。アラストルは禿げてもアラストルだから」
「はぁ？」
「きっと禿げても大好きだよ。アラストルのこと」
だって、雨の中わざわざ『玻璃』を探しに来てくれた。
「馬鹿なこと言ってなくていいから降りろ。自分で歩け」
「…嫌」
「はぁ？」
アラストルは玻璃を睨む。
だけど、玻璃は気付かないふりをした。
「足がじんじんするの」
冷たいでしょ？　とわざとらしく言う。
本当はただもう少しだけアラストルの腕の中で、確かに存在していることを実感したいだけだった。
「ったく……お前はリリアンより甘えん坊だな。ガキ」
「煩い三十路。シルバより口うるさい」
「そう言っている間にお前もすぐ三十代になるんだぞ？」
「その頃にはアラストルは棺桶に片足突っ込んでるどころか全身入

ってるかもね」
玻璃が言うとアラストルは笑う。
「そのときは道連れにしてやるよ」
「べつにいいけど。アラストルが居なくなったらきっとこのクレッシェンテは酷く退屈だよ」
だって雨が多いもの。と玻璃は言う。
「俺が居ないと退屈か」
「うん。だって、雨の日に構ってくれるのはアラストルだけだから」
初めて会ったのも雨だったねと玻璃が言うとアラストルは小さくああと。
「お前は雨女なんじゃねぇのかぁ？」
「アラストルが雨男だと思う。だってアラストルに会う前はこんなに雨に遭わなかった」
「俺だってお前に会うまでは…って俺たちが揃うと雨かぁ？」
そういや前に二人で植物園に行ったときは記録に残る集中豪雨になったなと彼は言う。
「…祟られてる？」
「…かもな」
二人で顔を見合わせて笑う。
その頃にはもう、アラストルの自宅の前だった。

部屋に戻るとまず、ストーブに火を点ける。
石炭独特の臭いが部屋に充満する。
「ほら、これで髪を拭け」
アラストルがタオルを二枚取り出し、そのうちの一枚を玻璃に投げる。
「ありがとう」
「ったく…だから雨はめんどくせぇ。髪が乾くのに何時間かかるん

だぁ？」
玻璃もアラストルも髪を絞れるほどずぶ濡れだった。
「おい、そのまま座るな。ベッドが濡れるだろ」
「…床に座る元気も無い……」
そう言って、玻璃は長椅子に座り、靴を脱ぐ。
「お前な…元から遠慮が無いのも知っていたが、とりあえず言ってく。人の家でいきなり靴を脱ぐのは非常識だぞ？」
「日ノ本では靴を脱がない方がおかしいって言われたでしょう？」
「ああ」
「でも、こんな濡れた靴、どこでだって履いていたくないわ」
そう言って玻璃はストーブの前に靴を置いて乾かそうとする。
アラストルはそんな玻璃の隣に腰を下ろした。
「おい、もうちょっとこっち来い」
「ん？」
「まだ濡れてる」
そう言って彼はタオルで玻璃の頭をごしごしと擦るように拭く。
「ふふっ、こういうの久しぶり」
「なんだぁ？　シルバにもされたのか？」
「こういうのはよくマスターにされた」
「ほぅ、あいつがか？」
「うん。泥まみれになって帰ると、問答無用でプールに突き落とされてそのままお風呂に直行させられるの」
玻璃が言うととんでもない家庭で育ったなと彼は言う。
「お前も、髪が長いんだからもう少し気をつけろ」
「別に気にならない」
「べたつくだろ？」
そう言いながら、アラストルは丁寧に編みこまれていた玻璃の髪を解く。
「うわ…まだ水が出てくる…タオルもう一枚必要だな」
「……勝手に解かないでよ」

「悪い。だが、乾かねぇだろ？　結ったままじゃ」
彼は棚から一枚タオルを引き出し、再び玻璃の髪を丁寧に拭く。
「結構長いな」
「十年以上切ってないから。時々朔夜が揃えてくれるけど」
もうちょっと伸ばしてみようかと思ってると玻璃が告げる。
「いつまで伸ばす気だ？」
「飽きるまで」
「ショートも似合うんじゃねぇか？」
「絶対嫌」
「何でだよ」
アラストルが玻璃の顔を覗き込む。
「……だって…」
「ん？」
「短くしたらリリアンと一緒になっちゃう……」

そしたらアラストルがわからなくなるでしょ？

玻璃は俯く。
「馬鹿か。もう、お前を間違えたりしねぇよ」
「え？」
驚いた。
「いくら似てても、玻璃は玻璃だろ？」
優しく抱きしめてくれる腕に安心する。
「今、俺の目に映っているのは間違いなく玻璃のはずだが？」
アラストルの言葉に玻璃は嬉しくなった。
「ありがとう」
「ん？」
「ずっと怖かった。いらないって言われるのが…」

彼は何も言わずに玻璃の背中を優しく撫でる。

「やっぱり、雨が好きかも」

だって、貴方に出会えたから。

私の目に、映っているのは貴方だから……。

出会えてよかった。

心から思うよ。

逢えない時間が寂しくてたまらない。

雨……。
今日も雨、昨日も雨……。
きっと明日も雨が降るんだろう。

雨は嫌いだ。
服も髪も台無しになる。
外にでないと自然と書類仕事ばかりになる。
身体が鈍りそうだ。

ああ、彼女に会いたい……。

「瑠璃…」

彼女ならば、僕の退屈を紛らわせてくれる。
彼女ならばいつだって自由に好きな場所に居るのだろう。

いつも彼女が座っているベッドの隅が妙に寂しく感じる。
寂しい、という感情が残っていたことに驚く。
「一体何なんだろうね。君は」

書類の山を眺めたって退屈だ。

あの詐欺師の情報も無ければ恐怖の代名詞の情報も無い。
あるとしたら生意気な部下がまた監獄部の備品の予算を上げろだとかそういった内容の書類ばかりだ。
「…ったく、あの子には少し上下関係を教えなきゃいけないみたいだね」
真っ白な看守長。気に入らないよ。
仕事は良くこなしてくれるけれどあの態度と暴言は頂けない。
暴言だったら瑠璃もよく言うけれど、なぜか彼女とは違ってそれほど棘は感じないのだ。
次はいつ会えるだろうか。

いや、会えないかもしれない。
彼女は僕が嫌いだ。
捕まえなかったらすぐに逃げてしまうくせに捕まると酷く不機嫌な表情をするのだ。

瑠璃、風の少女。
もう既に少女と言う年齢ではない。
だけども、彼女には『女性』よりは『少女』の方が似合う気がする。
それはきっと彼女の雰囲気がそうだからだ。
悪戯っ子のような表情で僕をからかう彼女を恋しいなどと感じるのは最早末期だろうか。

風の少女を鳥籠にでも閉じ込めてしまいたい。
だけども、彼女にはちゃんと鍵は開けておいてあげなければならない。
だって、そうしないと、きっと彼女は自ら命を絶ってしまうから。
きっとお互い、ものすごく退屈が嫌いなんだ。

そんなことを考えていると、窓を叩く、少し弱々しい音がする。
この音は瑠璃じゃない。

「玻璃、何しに来たの？」
「……アラストルも瑠璃も構ってくれないの」
この子は……。
「僕は雨が嫌いなんだ」
「知ってる。だから来た」
ずぶ濡れだ。
この子はいつだって捨てられた猫みたいな目をしてさ、僕を見るんだ。
「仕方ないね。入りなよ。タオルはそこにあるから髪を拭いて、ああ、靴の泥はちゃんとおとしてよね」
玻璃は言われた通りにする。
姉と違って素直でいい。
髪の毛からぽたぽたと水が落ちる。
髪を拭いていたタオルは十分に絞れるほど水を吸収していた。
「ジル」
「何？」
「瑠璃じゃなくてがっかりした？」
「……いや、君でもいい。僕の退屈を紛らわせてくれるなら」
全く似てないこの双子。
だけどやっぱり目元とか口の端とか似ている気がして……。
彼女と重なる。

姉以上に放っておけない妹。
別に愛しいとかそういった感情は無いんだけど、小動物を見ているみたいで放っておけない妹。
「それで？　用もあったんでしょ？　わざわざ王宮まで来るって事

は」
ディアーナ幹部には危険なことのはずだ。
何せ国王はディアーナを嫌っている。
利用するときだけ利用できれば良いとの考えだ。
「これ、瑠璃から」
「え？」
「行けないからって。今、シエスタで任務」
そう言って、もう既に雨でぐしゃぐしゃになっている封筒を差し出す。
「君、お使いもちゃんとできないの？　普通は濡れないようにするんだけど？」
「……最初はポケットに入れてたの。だけど、窓を叩いてもなかなかジルが気付いてくれなかったから……」
そんなに前から外に居たのかと思うと驚く。
「ごめん、お詫びに温かいココアでも淹れさせるよ」
扉の向こうに居る部下にココアと紅茶を持ってくるように言う。

「ねぇ、玻璃」
「なぁに？」
「君から見て瑠璃ってどう？」
多分片割れとかそういった答えが返ってくるんだろうと思った。
「瑠璃？　姉？」
「そうじゃなくて」
「『風』になりたいくせになれない。あと、卑怯」
「え？」
「瑠璃は凄く卑怯なこと考えるの上手。だからそれでよく悪戯しかけた」
玻璃はトレイの上のカップを取りながら言う。

「厨房の調味料の蓋を全部緩めたり、塩と砂糖のラベル張り替えたり、小麦と火薬入れ替えたりした」
最後のは止めた方がいい。
「スケールが小さいくせに危険なことしてるね」
「そう？　見つかったらマスターにプールに突き落とされるの。中に鮫が居るのに」
どんな家庭で育ったんだろう？
こういうことは瑠璃は教えてくれない。
「よく、今まで無事だったね」
「うん。だからそう簡単には死なないんだよ。私も瑠璃も」
そう、笑う姿は時々見せる瑠璃の笑顔とは少し違う。
瑠璃はもう少し豪快に笑う。
玻璃はどちらかと言うと控えめな笑い方をする。
「君たちはあまり似てないね」
「うん。『似てる』は『個性が無い』ってことだから」
玻璃が言う。
確かにそうかもしれない。
ぼんやりとカップを見つめていると、紅茶の中に自分の顔が映っている。
それがとても妙な気がした。

しばらく瑠璃の話を聞いて、玻璃は「朔夜が待っているから」と言って帰る。
どんなに玻璃と話しても、妙に物足りない。
それは玻璃が瑠璃ではないからだろうか。
やっぱり、僕の退屈を紛らわせることが出来るのは瑠璃だけのようだ。

何をしたら笑ってくれるだろう。

何をしたらあいつは笑ってくれるだろう。
そんなことばかりを考えてしまう。

次はいつ来るだろうかとかそんなことばかり考えて、あいつのために、自分は飲まない甘ったるいココアを用意したり、小さなガキが喜びそうな絵本とかオルゴールとかを用意している。
そんな俺が馬鹿馬鹿しく思えるが、どうも、あいつには笑っていてほしいと感じるんだ。

だけど、何をしてもあまり反応が無い。
それどころか最近は顔を出さない。
まだ、なにか面白いものでも見つけたのだろうか。
そう考えるとさらに自分がおかしくなる。

「なぁ、女ってどんなモンを喜ぶんだぁ？」
酒場の店主に訊ねる。
「こりゃ珍しい質問だね。なんだ？　恋人でも出来たのかい？」
「いや、どっちかっつーと、妹みたいなモンだ」
「その子いくつ？」
そういや前に歳を聞いた気がするが……。
「……23、だったか？」
「また随分若い子だね。アラストル、そのくらいの女なら、花とか宝石とか贈ってもおかしくないだろ？」
「あいつはそういう奴じゃねぇんだよ。とりあえず食うもんと寝る

場所があればいいとかそんな感じの奴だ」
そう、俺の部屋の長椅子があいつの指定席。
そこで眠ったりココアすすったり、ピザ食ったり……。
まるでその長椅子が自分の空間だと言わんばかりに常にそこに居る。
「なら、焼き菓子でも用意してやったらどうだ？　図書館前のいつも行列が出来てる店があるだろ。あの店はかなり人気だ」
「げ…行列って何時間待つんだよ」
「早くて三時間だな」
「却下だぁ！　あいつにそこまで時間割けるか！」
思わず叫ぶと、店主は困ったように笑う。
「だったらその子が喜ぶようなことは自分で考えなさい。きっとその子もアラストルが自分のためにしてくれたことを喜ぶと思うよ」
「……とは言ってもな……」
思いつかねぇ……。

きっとあいつは他の女が喜ぶようなドレスや香水や宝石なんかは喜ばねぇ。
だからと言って人形なんて贈ったら子ども扱いするなと拗ねるだろう。
「…焼き菓子かぁ？」
ケーキだのクッキーだのはおそらくはリリムの部屋で飽きるほど食わされているだろう。
しばらくリリムの部屋には行きたくないと言っていたしな。
そういや、変な植物が好きだとか聞いたような気もしなくもない。
花屋に聞いてみるか。

「店主、世話なった。釣りはいらねぇ」
金貨を二枚渡して、店を出る。
行き先は花屋だ。

花屋にたどり着くと、よく見知った顔に会った。
「あ…」
「あ…」
二人揃って間抜けな顔。
「珍しいな」
「アラストルこそ」
「それ、何だ？」
「朔夜のハーブ。取りに来たの」
そう言う玻璃が手にしていたのは白い花をつけた植物の入った植木鉢。
「へぇ、これもハーブなのか」
「うん。これはね、葉を煎じると解熱効果があるの」
「詳しいな」
「たくさん教えてもらったから」
微かに笑う玻璃。
ひょっとしたらこいつは物より他人と過ごす時間が欲しいのかもしれない。
「ん？　これ、なんだ？」
足元に置かれていた妙な形の葉。
「あ、触っちゃダメだよ」
「何でだ？」
「指、挟まれる」
「はぁ？」
確かに、そこに在った植物は二枚貝のような形の葉をつけている。
「ハエトリソウの改造種。ネズミも飲み込んじゃうの。観賞用だけど少し危険」
それじゃあ、ハエトリソウじゃなくてネズミトリソウだろ。

「ネズミ駆除に使えそうだな」
「…あまりお勧めはしないわ。けっこうグロテスクだよ」
そういいつつも玻璃の目は輝いている。
おそらくは、買ったらネズミが捕まったところを見せてとでも言いたいのだろう。
「おーい、店主、これ二つくれ」
「はい」
店員から、ハエトリソウならぬネズミトリソウを二つ買う。
「ほら、ひとつやるよ」
「え？　いいの？」
「こういうの好きなんだろ？」
「うん」
嬉しそうに笑う玻璃。
「大好き」
玻璃の笑顔を見られて妙に安心する。

「玻璃、お前こそ食われねぇように気をつけろよ？　いかにも凶暴そうな植物じゃねぇか」
「平気。慣れてるから」
そういえばこいつの家庭は普通じゃなかったと思い出す。
「あ、朔夜が待ってるから行くね」
「ああ」
「また、遊びに行くよ」
玻璃の言葉に安心する。

『また』ということは次がある。
その事実が妙に嬉しい。

今度はもっとあいつの喜びそうなものを用意しよう。

一緒に出かけるチャンスを逃さず。（前書き）

クレッシェンテの宗教
「ルーン」という宗教で、キリスト教と仏教と神道と神話や妖怪話をごっちゃに混ぜたような宗教。祀っているのは月の女神。

一緒に出かけるチャンスを逃さず。

「どこか出かけるのですか？」
後ろから突然掛かってきた声に、朔夜はびくりとする。
「え、ええ…大聖堂まで」
「よく毎日飽きませんね。そんなに面白いところなのですか？　僕も同行させてください」
声の主、セシリオ・アゲロは少しばかり意地の悪い笑みを浮かべて言う。
「ええ、でも、セシリオには退屈かもしれません」
「いいえ、僕は僕の可愛い朔夜と一緒なら退屈しませんよ」
そう、彼は笑う。
「そう。では行きましょうか」
朔夜はセシリオにはバレないよう、小さくため息をついた。

（なんでこうなったのかしら？）

正直朔夜はセシリオと外を出歩くことはあまり好きではなかった。
自分はまだそれほど顔は知れ渡っていないが、セシリオ・アゲロという男はあまりにも有名すぎる。
町を歩けば好奇の目に晒されることも目に見える。
一緒に店に入りでもしたら店員はびくつき、まともに会話すら出来ないことも多々あるのだ。
「セシリオ、悪いけど顔を隠して頂戴」
「なぜです？」
「落ち着かないのよ。あなた、顔が知れ渡りすぎているわ」
朔夜は軽くため息を吐く。
「仕方ありませんね。帽子はあまり好まないのですが」

そういいつつ、彼は帽子を被る。
「これなら少し顔が隠れるでしょう？」
「…そうね」
そういう問題ではないのだが、とは思ったものの、朔夜は何も言えなかった。

「ここで待っていて頂戴」
「なぜです？」
大聖堂の前の広場で待っていてほしいと言うと、セシリオは途端に不機嫌そうな表情をした。
「だって中じゃ退屈でしょう？」
本心は、懺悔の姿を見られたくないと言うこともあるのだが、それは口には出せない。
「いえ、僕も行かせて頂きます。実は、まだ中を見たことが無いんです」
そう、楽しそうに笑う彼に、朔夜は微かに殺意を持った。
「朔夜、殺気を出さないでください」
「ごめんなさい。少し苛立っているみたいなの」
この程度の殺気を朔夜は『苛立っている』で済ませるが、普通の人間なら『苛立っている』という次元ではない。彼は納得いかない様子だ。
「僕に殺気を向けるのは利口ではありませんよ」
「ええ、ごめんなさいね」
殺意が芽生えてしまったのだから仕方ないと思いつつも朔夜は一応謝罪の言葉を述べる。
「では、私は懺悔室に居るので少し待っていてください」
「懺悔室？」
「己の罪を悔い改める場所です」

朔夜がそう告げると、セシリオは理解できないと言う表情をした。

回廊の絵を眺めながら、最近朔夜は変だとセシリオは思った。
どうも冷たい。
いや、それはもともとだったかもしれない。
だけども妙に避けられるのだ。
「おや、この絵は…」
いつだったか玻璃が描いた絵と同じだ。
「地獄絵、気に入ったのかしら？」
「いえ、前に玻璃が描いた絵と見事に重なる気がしまして」
「ええ、それは玻璃ちゃんが前に模写したのを見たのでしょう？
アルジズがすりかえられてもわからないほどの出来だと驚いていらっしゃいましたから」
そういえば玻璃はこれが好きだと言っていた気がした。
「嫌いじゃないですけどね。こういうのも」
「自分の行く先を見ているよう、ですわ」
ああ、そうかとセシリオは思う。
彼女はどんなに悔いようとも楽園へはいけないことを知っている。
それでもせめて地の底へと落ちるまでの心の支えを欲しているのだと。
「朔夜」
「はい？」

「僕もここが気に入りました。また同行させてください」
「え？」
「この絵を見に来たいのですよ」
貴女と一緒に。
その言葉を飲み込んで、朔夜を見る。
「ええ、そうですね」

貴女と居られる時間を増やせば、貴女の心の支えになれるのでしょうか？
セシリオは朔夜に気付かれないようにそっと祈る。

神というものの存在は信じませんが、朔夜の心の支えになるのでしたら、我々の命が終わるときまで存在していてください。

帰り道、再び町の中を通る。
薄暗くなってきたこともあり、セシリオを好奇の目で見るものは居なくなった。
「セシリオ、ちょっとこの店に寄ってもいいかしら？」
「ええ、構いませんよ」
朔夜の言葉にセシリオは目を細める。
そういえば二人で出かけるのは久しぶりだったと思う。
「たまにはこんなのも悪くないわね」
「ええ」
また、一緒に出かけるのも悪くない。
朔夜は微かに笑った。

この鼓動は治まることを知らない。

心臓の音。
雨の音。

今日の標的は、かなり怯えているようだ。
雨の音に混ざって聞こえる標的の心臓の音はダンスを踊れそうなテンポだ。

「その命…頂戴」
喉にナイフを滑らせれば一瞬で男は息絶える。

「任務完了」

人間ってあっけない。
心臓の音は止まった。
人から物へ変わった。

胸にそっと手を当てると、トクン、トクンと鼓動が鳴る。
これが唯一知っている生きている証。
でも、きっといつかは私も、今まで殺してきた人間たちみたいに、この鼓動が止まって……。
きっと『玻璃』からただの物体に変わるんだ。
怖い。
『玻璃』が『玻璃』じゃなくなったらどうしたら良いんだろう……。
どうなるんだろう……。

この世に生まれ出でて、『玻璃』と呼ばれた。
だから私は『玻璃』だと思っていた。
だけどもしそうじゃなかったら？
もし、私が『玻璃』じゃなかったら？
一体私ってなんなんだろう？

さっきの標的に負けないくらい私の鼓動も速くなる。
でも、あの標的と違うのは私の鼓動はまだ止まらないということ。

「生きてる…」

まだ、ちゃんと生きている。
その事実に少しだけ安心してまた不安に襲われる。

私は…。

私とは一体何なんだろう…。

「生きてる…」

今、生きて、呼吸している。
だけども、なぜかそのことにゾッとする。

この鼓動は止まることは無いのだろうか？
いっそ誰かこの鼓動を止めてくれないか……。
怖くて怖くて堪らない……。

「誰か…助けて……」

だけど、誰もこの恐怖からは救ってくれない。
だって……。
今、この鼓動を止めてしまったら……。
ただの『玻璃』がただの『モノ』に変わってしまうから……。

一歩進みたいから貴方に言うのだ。

アラストルはシルバじゃない。
ちゃんと解ってる。

だけどね。
シルバのこと、忘れられないんだ……。

クレッシェンテは本当に雨の多い国だと玻璃は思う。
日ノ本の梅雨とはまた違った雨が降り続く。
どちらかと言うとスコールに近い激しい雨。
だけども、スコールのようにすぐには過ぎ去ってくれない。
長雨とでも言うのだろうか。
とにかく雨が続く。
この国は雨の国なのかもしれないと玻璃は思った。

だけども不思議と、悪いことは雨の降らない日に起こる。
だからだろうか。
玻璃は雨が降ると安心するのだ。

「来たよ」
「おう、ちょっと待ってろ。あとこれで終わる」
珍しく、玻璃はハデス本部に足を踏み入れた。
この場所はあまり好きではないというのが玻璃の本心ではあるが、

雨の日に構ってくれるのはアラストルだけだという状況が玻璃をこの場所に向かわせる。
「今日は任務は無いのか？」
「…もう、ずっと無いよ」
「ああ、そうだったな」
早く転職しろよ。と彼は言うが、暗殺者として生きてきた玻璃にとってそれ以外の仕事などは知らない。
とある詐欺師の下で一日だけ修行をしたが、師と相性が悪かったのか、僅か半日で玻璃は飛び出してしまった。
「詐欺は向いていなかった」
「ああ、そうだな」
アラストルはそんなことは解ってるから普通の仕事を探せと言うが、玻璃にはそれは難しい。
「この前喫茶店で仕事貰った」
「どうだった？」
「お皿三十枚割ってクビになった」
「おーそりゃあクビになるだろ。他はねぇのかぁ？」
もう、アラストルも諦めているようで、あまり真剣には取り合ってくれない。
「…炭鉱行った」
「そりゃまた随分ハードなの選んだな」
「つるはしが持ち上がらなかった」
「……普通の仕事探せぇ」
彼はそういうが、クレッシェンテにはそれほど普通の仕事は無いのだ。
あっても賃金は今までの百分の一程度。
それで生活が出来るかと訊ねられると玻璃は不安だった。
それは、一生分の貯え程度はある。
だけども、玻璃は不安なのだ。
何もしていない時間が。

「昨日、どっかの仕事見つけたって言ってなかったか？」
「……依頼主が殺されたから無かったことになった」
「そりゃまた気の毒だな」
玻璃はアラストルの机の横に置かれた椅子から書物を降ろしてそこに座る。
手に持っているのは新聞の求人広告。
「…文字が書けないとどこも雇ってくれない」
「あー、そういやお前、字が苦手だったな」
「……まぁ、また殺し屋に戻ればいい話しだけどね」
やっぱりそれが一番しっくり来ると玻璃は思う。
結局自分には人殺し以外の仕事は向いていないのだと。
「絵はどうだ？」
「なに？」
「お前、絵得意だろ。ほら、国立大学の何とかって昆虫学者が図鑑の絵を描く人材が欲しいとかってこの前うちに来てよ。だけどもステラの奴断ったんだ。虫の絵なんて描けるかって」
「虫？」
「ああ、蝶とか蛾の専門の学者だからそんなのばっかりだけどよ」
絵を描いていてお金をもらえるならそれ以上にいいことは無いと玻璃は思う。
「本当に絵を描くだけ？　殺さなくていい？」
「ああ、むしろ殺したらダメだ。ちゃんと観察しながら忠実に描く。出来るか？」
「うん」
「なら、その学者に連絡しといてやるよ」
「ありがとう」
アラストルは面倒見が良い。
仕事の斡旋までしてくれる。

（それは私がリリアンに似ているから？）

玻璃は思う。

だけど、もう、私はシルバとアラストルは間違えない。

ちゃんと、光の溢れる世界で生きられるようにならないといけない。

「アラストル」

「なんだぁ？」

「今はまだ、無理かもしれないけど、いつかきっと、光の溢れる世界の住人になるよ」

これは決意と言うにはまだ足りない。

だけども、玻璃の精一杯の願い。

「ああ、そうだな。お前は光の溢れる世界のほうが似合う」

こんな雨ばっかりのいつも闇に包まれたような国の裏社会ではなく、もっと外の明るい世界がとアラストルは笑う。

「がんばれる気がする」

「ああ」

「一歩ずつ、だよね？」

「ああ、ゆっくりで良い。お前ならきっと出来る」

そう言って、彼は玻璃の頭を撫でる。

「アラストルがそう言ってくれると出来るような気がするんだ」

「なら、やり遂げて見せろ」

少し意地悪く笑う彼に、玻璃も笑う。

「クレッシェンテを出れるかな？」

「外に行きたいのか？」

「うん。もっと、世界を見たい」

こんなクレッシェンテとか日ノ本とかシエスタみたいに汚れきった裏の顔が横行しているような国じゃなくて、真っ白な光に包まれた世界を。と玻璃は夢見る。

本当にそんな世界があるかは分からない。
だけども、あるか分からない夢のような世界だからこそ目指したいのだ。
「私にはこの国は狭すぎる」
「言ったな」
「勿論」

だから、もっと広い世界に。

先に踏み出すために。
貴方だから告げられる夢を……。

これはまだ第一歩なのだ。

「今から言うこと絶対に嘘じゃないから」

「だーかーらーっ！　何で会うたびにお前は私を拘束する？」

珍しく雨の止んでいるクレッシェンテ首都ムゲットのスラム街に瑠璃の叫び声が響いた。

「煩いよ。瑠璃」

「誰のせいだ？　だ・れ・の」

「瑠璃でしょ？　僕を見るたびに逃げるくせに」

「当然だ。私は縛られるのが嫌いなんだ」

「だから手錠にしてあげているんじゃないか」

噛み合わない。

瑠璃は思う。

どうやらこいつとは根本的に何かが合わない。

「そういう問題じゃない！」

「じゃあ、どういう問題？」

しれっと言ってみせるジルに瑠璃は苛立つ。

「拘束具を使うなって言ってるんだよ！」

左手を繋いでいる拘束具を間接を外すことによって何とか外す。

「ったく…お前に会う度に骨格が変わる気がするよ」

「それは瑠璃がいちいち間接を外すからでしょ？　大人しく僕に捕まってればいいのにさ」

「……絶対嫌だ。お前絶対拷問とかするだろ？」

「して欲しいの？　だったらしてあげてもいいけど」

何が良い？　とジルは楽しそうに言う。

「いらん。ったく…カトラスAといいお前といい…なんでこの国は

変態ばかりなんだ…」
噂のあの伯爵に会わなかっただけまだマシだと瑠璃は言う。
「カトラスA？　君、あいつにも会ったの？」
「ああ、使いの帰りだよ。今日は」
そういう仕事は玻璃にさせればいいんだと彼女は忌々しそうに言う。
瑠璃のプライドは『おつかい』なんてものは許せないようだ。
「で？　何してきたわけ？」
「商談。それ以上は言えないな。私もまだ命は惜しいからね」
「そう。他は？」
「すぐ逃げてきた」
あの変態に付き合うのはもう嫌だと心からそういう瑠璃に、ジルは微かに笑う。
「あの詐欺師には宮廷も迷惑している。情報提供してくれると凄く助かるんだけど？」
「悪いがそういうわけにはいかない。こっちも仕事だからね」
瑠璃は悪戯っぽく笑う。

「君には敵わない」
「そう」
「どうせまた僕から逃げるんだろう？」
「そうだね。籠は必要ない」
籠があっても壊してしまうからと瑠璃は言う。
「けど」
「なに？」
「お前の部屋の窓が開いていたらひょっとしたらお前の場所に行くかもしれない」
私は気まぐれだからねと彼女は笑う。
「同じこと、あの詐欺師にも言ったの？」
「まさか」

心外だと、瑠璃はわざと真面目腐った表情を作ってみせる。
「よく聞け。これから言うことは嘘じゃないぞ。宮廷騎士団長殿」
「なに？ふざけてるの？」
不機嫌を顕にジルは言う。

「わたしはお前のこと、結構気に入っている」

「え？」
「お前のことは嫌いじゃないって言ってるんだ。その拘束具は嫌いだけどね」
悪戯っ子のような笑み。
それが瑠璃という一人の人間の全てを現しているように見える。
「それじゃ足りないよ」
「え？」
「だって、嫌いじゃないは『好き』じゃないから」
ジルは言う。
君の好きが欲しいと。
「強欲」
「ああ、そうだよ。だって僕はずっと君が欲しい」
「悪いけど、それは断るよ。私の『好き』はかなり高い。宮廷騎士団長の安年収じゃとてもじゃないけど買えないなぁ」
おどけて言う瑠璃にも、ジルは真面目に答えようとする。
「クレッシェンテではかなりの高収入のはずなんだけどね」
「私の年収とは桁が三つくらい違う」
「君が貰い過ぎなんだよ」
「そうか？　ついでに言うと玻璃は私の倍は稼いでるぞ？　なんたってあいつは趣味が仕事だからな」
そう、笑う瑠璃にジルはため息を吐く。
「君は、僕をからかうか妹の話しかしない」
「そうだっけ？」

「そうだよ」
すると瑠璃は少し考える。
「なら何の話をしたい？」
お前と私じゃ共通の話題など無いだろうと瑠璃は言う。
「経済とか法律とかそういった難しい話は苦手だし、朔夜や玻璃と違って薬草とか花にも興味はない。お前と何か共通の話題を見つけるのはかなり難しい。食べ物の話？　女の話？　そんな話してもつまらないと言うのが私の考えだが？」
「僕はもっと君の事を知りたい。なぜ君が『ヴェント』と呼ばれているのかとか」
「それこそ僕は退屈だ。自分の話ほど退屈なことは無いよ。なにせ、興味の対象外だ」
瑠璃は大きくあくびをする。
「次回までの宿題だ。なにか私の興味を引く話題を用意しておけ。相手してやらねぇことも無いぜ」
そう言って瑠璃は駆け出す。
見えなくなるまでそう、時間は掛からなかった。
瑠璃が居なくなったその通りには、ただ、一陣の風が吹いた。

あの時の選択。（前書き）

独りになってしまった人に１０のお題

- あの時の選択。
- 独りで生きる意味。
- 昔＝二人。今＝一人。
- 思い出の場所を歩く。
- 記憶の中での貴方の顔。
- あまりにも寂しすぎるから。
- 問いかけた声に返事はない。
- まだ、この癖が抜けない。
- 「孤独」の意味を辞書で引く。
- 其処に行っても良いですか？

配布元：「Ａｂａｎｄｏｎ」
ＵＲＬ：ｈｔｔｐ：／／ｈａｒｕｋａ．ｓａｉｉｎ．ｎｅｔ／~ｔｉｔｌｅ／０／

あの時の選択。

あの時、あの小さな手を掴んでいたら人生はだいぶ変わっていたかもしれない。

クレッシェンテという国は昔から娯楽が少ない。
娯楽といえば大人たちが酒場に集まって賭け事をしたり、町のど真ん中で武道大会が開かれたりする程度で、子供が喜ぶようなものなど殆ど無かった。

そんなクレッシェンテに、年に一度だけ子供も喜ぶような大きなイベントがある。
巡回サーカスだ。
遠い異国の珍しい動物やら異形の人間やらを見せたりとても人間業とは思えない技を見せるものも居る。

そんなサーカスは大聖堂前の広場で開かれる。
年に一度、その場所にクレッシェンテ中の人間が集まるといっても過言ではなかった。

「お兄ちゃん早く早く！」
アラストル・マングスタもその一人。
妹リリアンに引っ張られ、ほぼ無理矢理その広場に連れて来られた。
正直なところ、彼はあまり人混みが得意ではなかったが、可愛い妹のため、断ることはしなかった。

「おい、もっとゆっくり歩け」
「だってレオーネが来るんだよ」
「レオーネ？」
「猛獣使い。おっきな猫がたくさん侍ってるんだって」
「ほぅ…って、お前なぁ。そりゃ猫じゃなくてライオンじぇねぇのかぁ？」
アラストルは呆れたような表情でリリアンを見る。
「お前、帰ったらちゃんと勉強しろよ？」
「はぁい。でも、お兄ちゃんにだけは言われたくなーい」
「うるせぇ」
アラストルはリリアンの頭をくしゃくしゃと撫でる。
「お兄ちゃんやめてよ、髪の毛ぐしゃぐしゃ」
「お前は少し落ち着きがねぇ」
「だって、サーカスが楽しみだもん」
十三歳とはいえまだ子供か、とアラストルは笑う。
いつまで『お兄ちゃん』と呼んでついて歩いてくれるか。
世間では兄は疎まれるというが、今のところリリアンにそんな様子は無いとアラストルは思う。
そんな時だった。

「おい、リリアン？」
妹の姿が見えない。
おそらくはこの人の波に呑まれ迷子になったのだろう。
そう思い慌てて探す。
「リリアン！」
叫んでも人混みの雑音に飲み込まれ声は届かない。
人の波を掻き分け、必死になって妹の姿を探す。

「リリアン！」
「玻璃！」

同じタイミングで叫ぶ男が居た。
自分と同じく銀髪の男。
背格好も髪型もほぼ同じその男にアラストルは僅かながらも驚く。
大方迷子になった子供でも探しているのだろうと思った。
これで妹ならば凄い偶然だと。
そして、彼の視線の先に少女の姿が見える。
リリアンだ。
そう思って声を掛けた。

「おい、勝手に先に行くな！　探したんだぞ」

すると彼女は顔を見上げ、不思議そうな表情でアラストルを見る。
「……シルバじゃない……だれ？」
驚いたように目を見開く少女を見るとリリアンに瓜二つではあるものの、微妙に衣服が違う。
「わ、悪い。妹を探していて…人違いだった」
「そう…ねぇ、シルバ見なかった？」
「シルバ？」
「あなたと同じ銀髪の剣士。はぐれちゃった」
今にも泣き出しそうな表情で言う少女にアラストルは困惑する。
「さっき向こうですれ違った。噴水の傍で動かずに待ってろ。そうしたら見つけてもらえる」
「う、うん」
背格好も表情までもリリアンと重なる少女。
彼女が探しているのは自分とよく似た男。
凄い偶然だとアラストルは思った。

突然、二発の銃声が響く。

「なんだ？」

慌てて銃声の方へ駆ける。

先ほどの少女も同じように駆けるが彼女の方が少しばかり速かった。

「シルバ！」

彼女が駆け寄ったのは先ほどすれ違った男。

先ほどと違うのは彼が赤く染まっていることだった。

「リリアン……」

男に庇われるようにして、男の下で倒れている少女。

それは紛れも無く、アラストルが探していたリリアンだった。

翌日の新聞の一面に、その事件が載った。

『銀の剣士と黒の少女』殺された二名。

それに良く似た銀の剣士と黒の少女が居たとは、その場に居た誰も考えなかっただろう。

あの時、リリアンに似たあの少女の手を掴んでいれば、リリアンは死なずに済んだかもしれない。

あの時、あの少女が俺を自分の連れだと思い込んでいればあの男も死なずに済んだかもしれない。

「なぁ、玻璃」
「なぁに？」
「お前、前にも俺に会ったことがある気がするって言ってなかったか？」
遊びに来ていた玻璃に訊ねる。
「うん」
「思い出した。十年前、一度お前に会ってる」
そう、アラストルが言うと玻璃は何も言わずに頷く。
「あの時お前の手を掴んでいたら未来が変わっていたかもしれないって思った」
「そう。でも、もう過去は書き換えられないわ」
玻璃の言葉に頷く。

「私はリリアンが羨ましい」
「何でだ？」
「だって、シルバと一緒に居られて、アラストルに今も想われてる」
玻璃の言葉に少し驚く。
「私を想ってくれる人はもう誰も居ない」
「何言ってる。俺が居る。確かにリリアンは大事だが、お前も大事だ」
彼が言うと、玻璃は微かに笑う。
「その選択は後悔しない？」
「ああ」
彼の答えに納得したように玻璃は笑う。

「だったら、もう後悔しない未来を作らなきゃ」
それはきっと決意だった。

独りで生きる意味。

独り残されたことに何か意味があるのだろうか。
仕事を終え、部屋で独りきりになると、蘭はよく考えた。

かつては夫も子供も居たが、今はただ独り。
愛した彼女も現れては消え、再び巡り逢う。
そうしてまた、独りになり彼女に出逢う。

一体何故？

「全ては必然。だけども理由が解らないわ」
人々は自分を『全能の時の魔女』と呼ぶ。
だけどもそんなことは無いと蘭は思う。

自分はただ、人より長く生き過ぎた分、人より知識があるだけだ。

長生きと言うのは人が思っているほど楽しいことばかりではない。
生きた分だけ出会いがあって、別れがある。

「神に見捨てられた身としてはこれは罰として受け入れるべきなのかしら？」
かつて天上で過ごした日々の記憶は既に薄れ始めている。

だけども、『忘却』というものは自分の中に無いのかもしれない。
身体が忘れていても、脳内には映像のように確かにその場にあったものを全て記憶している。

「ああ、彼女に会いたいわ」
もうひとり、神に見捨てられた憐れな少女。
今は、『玻璃』だったかしら。
何度廻った彼女に出逢ったかはもう、数えるのも飽きてしまった。
だけども、彼女の死は『安息』にはならないのだ。
また、すぐに廻る。
だけどいつも黒い髪と赤い瞳。

「すぐに見つけ出す。これもまた運命…」
蘭は砂時計を抱く。
「…退屈ね。三時間戻してみようかしら?」
それで何か解決するわけでもない。
ただ、考える時間が三時間増えるだけ。

今日の依頼人。あまり好きにはなれなかった。

「時の魔女にとって百年なんて一瞬でしょ、か……確かに、そうかもしれないわ…」
でも、その一瞬に普通の人間の何十倍もの苦痛が詰まっているなんて誰も思いつきはしないでしょうね。
蘭はただ、さらさらと流れる砂を見つめる。

「もう、戻すのも無駄ね」
今戻したらきっとまたあの依頼人に会ってしまう。
そうしたら自分は自分で居られるだろうか。

「時は…流れに任せるもの。だけども」
ほんの一瞬、未来を垣間見ることは許されるはずだ。

そう、神に告げたのは何千年前だろうか。
そうしてやがて追放されたのだった。
「過ぎた好奇心は罪になる。だけども彼女はわきまえているわ」
私と違って。と蘭は自嘲気味に呟く。
「私の可愛いクロツグミ。何度廻っても探してあげるから…」
私が貴女を探すのも必然。と彼女は呟く。

ああそうだ。
今、私が独りなのは彼女を探すためなのかもしれない。
「明日はセシリオのところにお茶でもしに行こうかしら？」
きっとものすごく嫌そうな表情をする。
そう考え、蘭は静かに笑った。

昔＝二人。今＝一人。

夏の晴れ間の雨。
天気雨だろうか。
遠い異国では天気雨の日は狐がお嫁に行くらしい。
その様子を想像すると酷くファンタジックな気がするのは私だけではないはずだ。

雨の合間に晴れると、どうもあの日を思い出す。

天気雨。
僕から私へ変わった日。

十三年前、まだ、私の相棒は玻璃だった。
双子で仲良く殺し屋をしていたのだ。
だけども、十三年前の天気雨の日、玻璃はあいつと組んだ。

『アルジェンテ』
銀の髪の剣士だった。
アルジェンテというのはコードネーム。玻璃は一度もその名では呼ばなかったし、彼も玻璃を『ドーリー』とは呼ばなかった。

「お前がちゃんと生きてれば…玻璃は独りにならずに済んだんだ」
ムゲットの外れの墓地で、届くはずも無い冥界の住人に言う。
手向ける花は白い曼珠沙華。
かつて玻璃が、そしてあいつが好きだった花。
「白い曼珠沙華は赤く染まる術を知らない…か」
赤く染まる必要なんて無い。

だけども、あいつらは赤く染まりたかったのだろうか。
「シルバ、お前は見事その銀髪を赤く染めたじゃないか」
だけどもあいつは漆黒。
赤くなんて染まりやしないさ。
「私の方があの子に近かった。なのに何故！」
何故、玻璃はお前を頼ったんだ！
行き場の無い怒りがこみ上げる。
この感情は嫉妬だ。
なんとも醜い。
知っている。
だけども、止められるはずもなかった。

「僕も一人になってしまったじゃないか…」
お前のせいだ。
お前が居なくなってから、玻璃は誰とも組まなかった。

『もう、相棒を失いたくないの』

そう、玻璃の口から聞いたのは九年前だった。
「ヴェントは風には成りきれない」
だから私は……。

独りを好むふりをした。

お前が辛いなら私も辛くなろうとした。
だけど、それは何の意味も無かった。

「玻璃、昔は一つだったのにな…」

昔は二人で一つだった。
だけど、いつの間にか……。
『自我』が芽生えてしまったのだ。

「ただ人形になれればどんなに良かったか…」

全てが嘘なら、
夢なら、
本当に良かったのに……。

そう考え、頬に涙が伝った。

思い出の場所を歩く。

「朔夜、ごめん」
「謝らないでヴァレフォール」
待ち合わせに、ヴァレフォールはいつも遅れてくる。
そうして、かならず「朔夜、ごめん」と言うのだ。
「今日は植物園に行く約束だったよね」
「ええ」
お互い主に隠れての、ほんのひと時の幸せな時間だった。

いつも朔夜がヴァレフォールと待ち合わせていたのは大聖堂前の噴水広場。
ここなら礼拝に行くと言ってくることも可能だし、実際朔夜は毎日大聖堂の中で懺悔する。
マスターを裏切るような行為と、幸せを感じてしまう自分への罪悪感を消し去ることは難しかったが、それでもヴァレフォールに会うことは、朔夜のささやかな幸せだった。

「ヴァレフォール…」
初めて会ったのも、別れがあったのも全てこの場所。
そう思うと朔夜は胸が痛かった。
この国は凄く居心地が悪いと朔夜は思う。
特にこの場所は。
幸せな想い出も悲しい思い出も全てここにあるのだ。

今も目を閉じればヴァレフォールの空色の髪と瞳が、優しい微笑が、少しばかり背伸びしようとしいた装飾品が、無理して吸っていた煙草の臭いが……。
全てを鮮明に思い出せる。
耳を澄ませば、今にも、「朔夜、ごめん」と言って彼がぽんと肩を叩く音まで聞こえそうだ。

「あなたの居ないクレッシェンテでどう生きろと言うの？」

殺したのは私。
だけども……。
一緒に死にたかった……。

朔夜は今からでも遅くないのではないかと思ってしまう。
そう、この場所に来ると必ず『死』を望んでしまうのだ。

「朔夜」
「え？」
突然上から降ってきた声に驚く。
「玻璃ちゃん？」
上からの声の主は玻璃だった。
噴水の淵によじ登ったのか座って足をばたばたと動かしている。
「朔夜、この場所嫌い？」
「え？」
「いっつも哀しそうな顔してるから」
玻璃は何を考えているのかわからない表情で、大きな赤い瞳で朔夜の目を覗き込んだ。

「いいえ、嫌いじゃないわ。でも、色々思い出すの…」
そう言って、シルバもここで死んでいたのだと思い出す。
「ここは死者が多い。黄泉の国に繋がる門がこの噴水の真下にあるの」
「え？」
「だからかな、ここ、凄く落ち着く」
玻璃の言葉に驚く。
「また、アラストルと喧嘩しちゃった」
「まぁ」
「マスターが朔夜のこと待ってるよ」
玻璃の言葉を聞いて、アラストルとの喧嘩は嘘かも知れないと朔夜は思った。
「すぐ戻るわ。今日の夕食は何がいいかしら？」
「ピザ」
「昨日も食べたでしょ？」
「……じゃあポトフ」
「解ったわ。暗くなる前に帰ってくるのよ？」
「うん」

まるで子供に言い聞かせているようだと朔夜は思った。
そういえば、ヴァレフォールと一緒に居た頃も、玻璃はこうやって時々神出鬼没に現れた。
なぜか朔夜が沈んでいるときはそれを察知したかのようにここに現れるのだ。

「朔夜」
「なぁに？」
「私はこの場所、好きだよ」
「え？」
玻璃の言葉に少しだけ驚いた。

「だって、アラストルとあった場所だもん。それに、初めての任務でシルバがごご褒美くれたのもここだった」
玻璃が微かに笑って言う。
「ええ、私もこの場所が好きよ」
確かに哀しい思いでもあるけど……。
ヴァレフォールとの楽しかった時間もたくさん詰まっているのだ。
「……自然に足がここに向かってしまうみたいね」
ひょっとしたら期待しているのかもしれない。

『朔夜、ごめん』
『謝らないでヴァレフォール』
もう一度、幻でもあの日常を。

記憶の中での貴方の顔。（前書き）

『オルギデーア』
『変わらぬ愛を君に』

『アザレーア』
『愛されることを知った喜び』

記憶の中での貴方の顔。

「　　」

そう、微笑む彼の顔。

なぜ、今更そんな顔を思い出してしまったのだろう。

「彼は、私を何て呼んだのかしら？」

思い出せない。

そう、もう、彼の名前すら思い出せないのだ。

そして、彼は既に忘れてしまった私の名前を呼んだ。

「私は時の魔女……それ以外の何者でもないわ」

そう、自分に言い聞かせなければ、きっと私の精神は壊れてしまうから、そっと記憶の部屋に鍵を掛けましょう。

だけども、ふとした瞬間に、髪を撫でる手の温もりを思い出してしまう。

名前すら思い出せない彼の笑顔も、温もりも…みんな覚えてる…。

「黄泉の国へ行く月の船に乗ってしまった人の名前なんて覚えたくも無いわ」

だって私は黄泉の国へは行けないもの。

「一人ぼっちになりたくない…」

でも、みんないつかは貴方のように、名前も思い出せないようになるの。

長生きはするものじゃない。

精神が壊れそうだ。

どんどんと犯されていく。

過去の残像に、未来への恐怖に。

『時の魔女』

そう呼ばれることにも既に疲れ果てている。
時の魔女だなんて言ったって実際は自分の時間は操れない。
ただ、ほんの少しだけ他者の時間に介入できるだけ。
「本当に全てを知ることが出来たなら…きっと私はこの命を終わらせている……」
いつか命に終わりが来たらこの苦しみからも解放されるはずだ。

「　　」
彼が、私を呼ぶ。
だけども声は思い出せない。
優しく微笑んで、よく髪を撫でてくれていたこと、私のまだ下手だった料理を笑いながらも文句一つ言わずに食べてくれたこと。
貴方の残像が消えないの。
名前すら思い出せない貴方の、細かな癖とかそういったものはすぐに思い出すのに。
名前も声も思い出せない。

そして、貴方が呼んでいた私の名も……。

「だって、貴方以外、誰もその名では呼ばなかったんですもの」
天に見放され、地の国で過ごしたときも、小さな村で暮らしていたときも、まだ、別の名前があった。
それも思い出せない。
そして、貴方がくれたその名前も……。

「私の過去には戻れない…」
自分の記憶には戻れないのだ。
こんな能力は必要ない。

そう思った瞬間、彼の悲しそうな表情が浮かぶ。

「顔が…消えない…」

お願い、消えて。
そう、何度願ったことか…。
どんなに記憶が薄れても、貴方への愛は変わらないの…。

貴方を忘れたい。
忘れたくない……。

この矛盾を、どうしたらいいの？

あまりにも寂しすぎるから。

独りになるって事をちゃんと理解できていなかった。
いつのまにかぽつんって一人ぼっちでさ。
いつも振り向くと笑って頷いてくれる人が居ないんだ。

初めての独りでの任務。
任務自体は凄く簡単。
敵に見つからずに設計図を盗み出すこと。持ち主を殺すこと。
そんなのは一瞬で終わった。
だけどね。
なんでかな……。
すごく不安なんだ。

「ちゃんとできたよ」
そう言って振り向いても誰も居ない。
瑠璃もシルバも居ないんだ。
そうして、ああ、独りなんだって気付く。
寂しい……。

誰も何も言ってくれない。
誰も居ないんだ。

任務先で笑いかけてくれる人も居ない。
任務が終わって「がんばったね」って言ってくれる人も居ない。
だからね。
すっごく哀しいって思うんだ。

《ココロなんてなければいい》

結論は結局そこだった。
暗殺者に感情はいらない。
ただのお人形になればいい。
そうしたら何も感じないから。

「ばいばい、《玻璃》」
こんにちは《ドーリー》

ドールの仮面を被ってしまえば、もう、何も感じない。

あまりにも寂しすぎるから。

あまりにも哀しすぎるから。

私　は感情を捨ててお人形になる道を選んだ。

問いかけた声に返事はない。

「生まれてきた意味は何ですか？」

「何故私は一人なのですか？」

問いかけたって答えはこない。

だって私はとうに天上に見捨てられたから……。

天におられる全能の神が全ての者を救うなんて嘘。

実際私は見捨てられたのだ。

地上の知識を求め、天上の知識を与えてしまったから……。

「私はいつまで一人ですか？」

「私にはいつ、死が訪れるのですか？」

問いかけても声は返ってこないのだ。

神の御声などとうに忘れてしまった。

天上の全てを忘れてしまった。

天におられる神は、既に私になど興味をなくしてしまったのだ。

「神よ。なぜ私をお作りになったのですか？」

問いかけても答えなど無い。

ただ、私は、孤独の中に、命の終わりを待ちわびるだけなのだ。

まだ、この癖が抜けない。

「ただいま」

誰も居ない部屋に自分の声だけが反響する。

誰も居ないと知っているのに、つい、言ってしまう。
これは既に習慣だった。
もう、何百年も続く。

特に食べる必要も無いのに夕食の支度を始めてしまう。
それも二人分。

「蘭、居るか？」
珍しい客人。
「あら、瑠璃ちゃん」
「マスターが薬頼みたいってさ」
「丁度良かったわ。夕食食べていかない？」
「お、良いのか？　蘭の料理結構好きなんだよ」
彼女は嬉しそうに言う。
「ええ、作りすぎちゃったの」

変な話だと、自分でもわかっていた。
名前も思い出せない人と過ごしていた日々の習慣が今も抜けない。
誰も居ない部屋に「ただいま」と言い、食べる必要も無い食事を作ってしまう。

「そうだ、この前の面白い薬さ、また作れるか？」
「え？」
「ほら、人間が猫に代わる奴」
「ええ、でもどうして？」
「ジルにちょっと悪戯してやろうかと思って」
「まぁ」
完全に悪戯っ子の顔をしている瑠璃に、蘭は笑う。
「面白そうね。今度結果をきかせて頂戴」
「ああ。勿論さ」
昔から悪戯っ子だと思っていたけれど、やっぱり瑠璃ちゃんは変わらない。
思わず便乗してしまう私も、昔から変わっていないのかもしれない。

「なぁ」
「なぁに？」
「蘭ってさ、絶対昔悪戯して怒られてただろ」
「あら？　バレた？」
怒られたというよりは、天界から追放されたんですけど。
まぁ、そんなことは言わない。
いや、言えないのだ。

「今度さ、玻璃も一緒に来ていいか？」
「ええ」
「蘭の料理、地味に美味い」
「まぁ」
昔、同じことを言っていた人が居たはずだ。
お世辞にも美味しいとは言えない、まだ下手だった料理をそう言って食べてくれた人が…

「瑠璃ちゃん」
「ん？」
「時の魔女、廃業しようかと思っているんだけど」
そう言うと、瑠璃はフォークを落とす。
「げっ…マジ？」
「冗談よ」
「心臓に悪いこと言うな」
少し怒ったような瑠璃に笑みが零れる。
「あら？　私が居ないとダメなのかしら？　あなた達のマスターは」
「ああ」

どうやら人をからかう癖も抜けないみたいだ。

「脅かさないでくれ」
「ごめんなさいね」
そう言って、つい、髪を指に巻く。

「蘭ってさ、楽しんでるとき、絶対髪の毛指に巻くよな」
「あら？　そうだったかしら」
瑠璃ちゃんと居ると、誰かを思い出しそうになる。

「……カロン」
「え？」
「いいえ、なんでもないわ」
そうだ、カロンだった。
「ふふっ、昔ね、貴女と同じように、私の癖を見つけては楽しんでいた子が居たのよ」
笑い出すと、瑠璃ちゃんはなんだそりゃ？と間の抜けた表情をする。

人の癖ってなかなか抜けない。

そう、実感させられた。

「孤独」の意味を辞書で引く。

「全く…理解できん」

ミカエラ・カァーネは不機嫌そうに辞書を投げ捨てた。
「そもそも『寂しい』とはどのようなものだ？」
一人が寂しい？
それがミカエラにとっては理解できない感覚だった。

一人で居ることに慣れすぎている。
それがミカエラ・カァーネと言う女だった。
仕事が恋人で嫌いなものは上司。
世界には好きなものと嫌いなものの二つしかなく、何事も白黒はっきりつけなくては気のすまない女だった。

特に、グレーゾーンなどに存在すると言う『人間』が彼女は嫌いだった。

彼女自身、ビアンコ・カァーネの異名の通り、『潔白』な人間なのだ。
つまり、ビアンコ、白である。

彼女の上司は《黒》の異名を持ちながらも気まぐれで曖昧で、彼女が嫌うものそのものだった。

「理解できん」
そもそも『孤独』とは何か？
ミカエラにとってそれは大きな疑問だった。

「人は生まれて死ぬまで孤独だ」
彼女は言う。
決して人と解り合うことなど出来ぬ、まるで孤島のようなものが人だとミカエラは考えている。
人と人の間には広大な海があり、時々地形が変動して近づいたり離れたりする。
それが人間関係だと彼女は信じている。

「ビアンコ・カァーネ、お悩みのようですね」
「黙れ」
忌々しい存在に声を掛けられてしまった。
「第一貴様は何故それだけ拘束されていながら冷静で居られるのだ？」
話しかけてきた相手、カトラスAことスペード・J・Aは重たい鎖と革のベルトで拘束され全く身動きの取れない状態で居る。
彼は食事さえも病人がするようなチューブから摂取させられる。排泄は紙おむつだ。
その状態で、彼は全く気を狂わせる様子も無く、窓さえないこの地下牢で、外に居るときと全く変わらぬ様子で過ごしているのだ。

「貴女ほどでは有りませんよ。ビアンコ・カァーネ」
僕と一日中一緒に居て気が狂わないのは貴女くらいだと彼は言う。
「ふん、そこらの無能と一緒にするな！」
「ええ、解っていますよ。ミカエラ」
彼はどこか甘さを含んだ声でそう言う。
酒場で女にその声で話しかければ一瞬で彼の虜になってしまうのだろうと言うほど妖しい魅力のある声ではあるが、ミカエラには通用しない。
「貴様に名で呼ばれたくは無い」

「これは失礼」
彼は悪びれも無くそういう。
「ビアンコ・カァーネ、貴女は非常に厄介な性格をしている」
「貴様にだけは言われたくないな」
この詐欺師が。
そう続けたい衝動を何とか抑えた。
「貴女は真っ直ぐすぎる。そして曖昧を嫌う」
「当然だ」
「全ての事態に答えが出なくては気がすまない」
「ああ」
「普通に考えれば暗示に掛かりやすいのですがね……」
そう、スペードは溜息を吐く。
「そこらの無能とは鍛え方が違う」

ミカエラ・カァーネと言う女性は大変負けず嫌いだった。
若くして宮廷騎士団長の尤も信頼の置ける看守官とまで言われるのはその性格と強靭すぎる精神力のせいだろう。
この監獄で唯一、カトラスAに太刀打ちできる精神力の持ち主なのだ。

「それで？　寂しさは理解できましたか？」
「理解できん。そもそも、何故孤独を恐れるのだ？」
一人を恐れる。
「でしたら、また脱獄して差し上げましょうか？」
「どう答えても貴様はまた脱獄するだろうが」
「ハハッ、ばれていましたか。まぁ構いませんよ。ですが、僕が居なくなった後、貴女はどう思いますが？」
彼は真剣にミカエラに訊ねた。
「行き場の無い怒りがまずあり、それから次はどんな拘束具にして

食事の量のバランスと睡眠時間を考えるな」
「逃がさないため、ですか？」
「ああ、貴様の首を取るのは我が上司の役目らしいからな。陛下も貴様の首の斬り落とされる瞬間を楽しみになされている」
「それは残念です」
全く残念そうではい様子のスペードにミカエラは眉をひそめる。
「貴様は何をしたい？」
「僕が居なくなることで、貴女が少しでも寂しさを感じてくださっているのではないかと期待していたのですよ」
彼は妖しい笑みで言う。

「残念だったな。私に『寂しい』など言う感情は無い」
「いいえ、確かにありますよ」
スペードが笑うので、ミカエラは彼の牢の唯一光の差し込む小窓を閉め、完全に遮断した。

これで彼の顔は見えない。
ただ、少し篭った声が聞こえるだけだ。

「無駄ですよ、ミカエラ。貴女は既に僕を必要としている」
勝ち誇ったようなスペードの声に、ミカエラは渾身の力を込めて彼の檻を蹴った。

地下牢に、金属の反響する嫌な音がしばらくの間鳴っていた。

其処に行っても良いですか？

もう、苦しいのです。
どうか罪深き私をお救いください。

何度そう願ったか既に解りません。
ただ、解っていることは、あの人がいないという事だけ。

ヴァレフォール。

貴方はどうしていつも私を置いていくの？
いつだってなんでも一人で決めてしまって、そして決まってこう言うの。
「朔夜、ごめん」
いつも笑って許していたけれど、今回ばかりは、このことばかりはとても笑って許せそうに無いわ。
ただ、毎日、毎日神に祈りを捧げ、あの日の罪を悔い、贖罪の歌

を歌うだけ……。

もう既に、幸福など許されぬこの身。

ただ、幾度も、幾度も貴方の残像を追い、ただただ、一人静寂の中、自分を抱きしめ震えている。

そんな日々を過ごすことしかできぬ。

朔日の月は私の心みたいで、もう決して満ちることが無いと言っているようで……

静寂の中、私はただ怯えている。

「ヴァレフォール、今から、貴方の場所に行ってもいいかしら？」

神の御前でそう問いかけても答えなんて返ってこない。

きっと神も知らぬ彼の返答。

だけども、何故だろうか。

脳内に記憶のなかの彼が。

そうして言うの。

「馬鹿なことを考えるな」

いつもの優しい笑みではなく、厳しい表情の、それでも、敵と対峙する時とはまた違う、どこか優しさを含んだ厳しい表情のヴァレフォール。

「朔夜、生きてよ」

あの雨の日と同じ、悲痛な表情で彼が言う。

これは……。

夢？

ただ、目の前に泣き出しそうな彼が居ることだけは確かで。

もう、幻でもいい。

貴方に逢えた……。

「ヴァレフォール、貴方とならば神の国へ行けなくたっていい。たとえ地の底へ行こうとも貴方が一緒ならそれでいいの……だから……私を傍に置いてください」

貴方の居ない私の胸には静寂しか無かった。

どんなに心を凍らせようとも貴方の残像が私の脳内を駆け巡って……。

ただ、寂しさだけがあったの……。

「朔夜、君にはまだ未来があるよ」

「貴方がいない未来なんて、哀しみしかないわ」

だから、早く貴方と同じ世界に行きたいの。

「君は、妹達を守る使命がある」
「……そう……でも、あの子たちにはマスターが居るわ」
「彼女達には君が必要だ。それに、彼もまた、君の力になってくれる」
マスターが？
「ヴァレフォール、貴方じゃなきゃだめなの……」
貴方が居ないと苦しいの。

だけども、ヴァレフォールは何も言わずに首を横に振る。
「朔夜、僕は……君とは居られない。だから……来世に賭けよう。次こそ、次の世界で君と再び逢うことを」
今度こそ、二人で、対立の無い世界で。
彼は言う。
だけどそんなものは信じられない。
「また、同じ運命を繰り返すの……また、来世でも私は置いていかれるの？」
「そんなことはしない。朔夜、きっと君を見つけて見せるよ」

これが夢だとしたら、なんて優しい夢だろうか。

「ヴァレフォール、きっと来世で、来世で逢いましょう」
「うん。じゃあ、おやすみ、朔夜。ゆっくり休むんだ。君には休息が必要だ」
そう言って彼は私の髪を撫でる。
「おやすみなさい、ヴァレフォール」

なんだか不思議な感じ。

ヴァレフォールが私におやすみだなんて。

優しい手……。

ヴァレフォール……。

貴方のところに行くのは、もう少し後にするわ。

生きてみせる。
ギリギリまで。

そうして、来世に希望をつなげて見せるわ。きっとね。

銀の剣士のそう優雅ではない休日

爽やかな朝の目覚め……。
のはずだった。

部屋の中にやかましい電話のベルが鳴り響く。
「朝っぱらから誰だぁ？」
アラストルが不機嫌そうに受話器を取る。
「おいおい、こちら……えっと。えっとね」
「玻璃、ふざけてる場合か？　ってか名前くらい考えとけよ」
「……」
無言で切られる。
「何がしたかったんだ？」
とりあえず、せっかくの休日は玻璃によって壊された。

仕方ないので朝食の支度をしようとすると、食料庫は見事に空だった。
「……今日は運気ががた落ちだな…」
特に占いなんかは気にしない彼であったが、朝から随分とついていないと思った。

仕方なく、アラストルは喫茶店で朝食を食べてから出かけることにした。
「全く…せっかくあの馬鹿共から解放されたと思った瞬間にこれか

？　ってかあの馬鹿、電話の使い方覚えた瞬間イタ電掛けてくるし…」
アラストルは疲れたと言わんばかりにため息をついた。
「ん？　てめぇ…」
会いたくない奴に会ってしまった。
「き、貴様！」
瑠璃だった。
「なんでてめぇがここに居るんだよ？」
「それはこっちの台詞だ！　玻璃はどこだ？」
「知るか！　俺は久しぶりの休暇なんだよ」
「そんなことしったこっちゃねぇよ！」
彼が彼女と出会うと必ず睨み合いに発展する。
アラストルはため息を吐いた。
「ったく……休暇くらいゆっくりさせてくれ…」
この一時間ほどで少し体重が落ちたのではないかとアラストルは思った。

食事を終え、彼はとにかく静かな場所を探した。
「…この国で一番静かな場所といえば…やっぱここかぁ？」
彼がたどり着いたのは大聖堂だった。
この国に神を信じて祈りを捧げる人間はほんの一握りしか居ない。
そう思ったとき、その一握りにあの女が居ることを思い出し、ここに来たことを後悔した。
が、もう既に遅かった。
「あら？　アラストル。貴方もお祈りに来たの？」
「げ…朔夜……」
ということはすぐ傍にあの男が居る可能性が高い。
「いや、俺は……折角だ。献金くらいはしてくか…」

アラストルはポケットの中をひっくり返し、ありったけの銅貨と銀貨を献金箱に突っ込んだ。
「…随分豪快ね」
「ん？　こういうモンじゃねぇのかぁ？」
「…いえ、そんなにたくさん入れる人は滅多に居ないから…」
そう言われ、アラストルは銅貨だけにしとけば良かったかも知れないと思った。
「なぁ、ここらで一番静かな場所ってどこだぁ？」
今日はもう、誰にも会いたくねぇと彼は言う。
「あらあら、だったら図書館や美術館に行ったら？　きっと静かだと思うわ」
「いや、リリムやステラに会いそうだ…ここならぜってぇ静かだと思ったんだが…家に帰りゃあまた玻璃からいたずら電話が着そうだしな…」
「大変ね」
朔夜は苦笑する。
「今日は大人しく家で休んでたら？」
「…そうするか……」
そうだ。電話は線を抜けば良い。
そう思い、アラストルは家へ向かった。

帰宅すると、いきなり「お帰り」という声がした。
幻聴だと思いたかった。
が、当たり前のように長椅子に寝そべって『詐欺入門』とか妖しげな本を広げている玻璃を見てしまった。
「…なんでお前がここに居るんだ？」
「アジトの居心地が悪くて」
「はぁ？」

「マスターが殺気を撒き散らしてるのを朔夜が宥めてる」
「おいおい…そんな理由で俺のところに来るな。姉のところに行け、姉の」
「……だって瑠璃は…なんか最近いい人出来たみたいで外泊多いし…」
だからと言って俺の家に当たり前のように居座るなと言いたかったが、相手が相手なので怒鳴れない。
「…仕方ねぇな……飯は作らねぇぞ？」
「さっきピザ注文した。一緒に食べよ？」
玻璃の言葉に驚いた。
「で？　何枚注文した？」
「…１５枚」
「…お前は何枚食うんだ？」
「１４枚」
こいつ化け物だろうといいたくなるのを必死で抑える。
「相変わらず食欲だけはあるな」
「食欲と睡眠欲は生物の基本だってマスターが言ってた」
じゃあお前は欲望の塊だろ。
心の中で言うとばれたのか睨まれる。
「ったく……お前の家じゃねぇんだぞ？」
「…ごめんなさい。でも、居心地良いから……」
そう言われてつい、嬉しくなる自分に少しばかり呆れながらも悪い気はしない。
「そ、そうか…まぁ、なんだ。寂しくなったらいつでも来い」
なんか邪魔もいっぱい入ったが……。
こんな休日も悪くねぇかもしれねぇ。
アラストルはそんなことを考える自分に苦笑した。

好きだから

「ねぇ、どこ行くの？」

ジルが鎖を引く。

途端に手首に激痛が走り、瑠璃は苦痛に顔を顰める。

「ジル、だから、そういうの止めろって言ってるだろ？」

苛々としながら瑠璃が言うと、彼は彼女の言葉を聞かずに、もう一度言う。

「どこ行くの？」

「家に帰る」

「家、あったんだ」

ジルが言うと、瑠璃はため息を吐く。

「…お前、さ、私のことなんだと思ってるんだ？」

「さぁね」

「私はリヴォルタじゃない。分かったらさっさとこの手錠外せ」

「嫌だ。だって、外したら瑠璃逃げるでしょ？」

「当然だ」

瑠璃は苛立っていた。

なぜこいつに見つかる度に様々な拘束具で拘束されなくてはいけないのだと。

今日、こいつに会ってしまったことが不運の始まりだと。

「これから大事な取引があるんだ」

「取引？」

「ああ、何とかカトラスAと接触できた。上手くいけばリヴォルタの情報も入る」

「カトラスA？」
『カトラスA』の名を聞いた瞬間ジルは不機嫌そうな表情で、瑠璃の手首を強く握る。
「痛っ、放せ！この野郎！」
蹴りを入れようともがく瑠璃の手首はきしきしと音を立て始める。
「痛いって！」
「痛くしてるからね。で？　なんでカトラスAなんかと君が会わなきゃいけないのさ。君なら部下がたくさん居るだろう？」
「カトラスAがどんな奴か見てみたいんだよ。上手くいけばそいつを殺す任務が貰えるかもしれない」

実のところ瑠璃の所属するディアーナも、カトラスAを信用しては居なかった。
むしろ彼は国中の敵だ。
それでも優秀さ故に彼に近づこうとする者も多い。

「カトラスAは僕の獲物だよ。手を出さないで」
「嫌だね。私だって戦士だ。戦いたくてうずうずしている」
「それにあんな男に君を見せたくない」
「生憎私は『風』だ。一つの場所には留まらない」
瑠璃はそう言ってジルを蹴飛ばし、ことんと音を立て、手錠を外す。

「お前には迷惑してるよ。いっつも拘束具使いやがって…なんか恨

みでもあるのか？」
「ないよ」
ジルは静かに言う。
「じゃあ、何で私ばかり集中的にお前の拘束具の被害にあわなきゃいけないんだ？」
瑠璃が不機嫌そうに言うとジルは静かに言う。

「好き、だから」
「は？」
「君が好きだから、どこにも行って欲しくない。ずっとそばに居てほしい」
ジルにとってそれは精一杯の素直な気持ちだった。
「生憎だが、私は束縛が嫌いでね」
そう言って瑠璃は窓枠に乗る。
「だけど、お前のことは、嫌いじゃないぜ？」
そう言って窓から飛び出す。

「またな！」
風に乗って瑠璃の声が響く。
なぜそんなことを言ったのか、彼女自身にも分からないが、それが凄く大切なことのように思えた。

残像と共に（前書き）

２０１０．３．１３（アラストルの誕生日小説）

残像と共に

仕事を終えたアラストルは少しばかり不機嫌な様子で、薄暗い自宅のアパートへと戻った。
誰も居ないその部屋はただ、暗闇と静寂に包まれている。

アラストルが明かりをつけると、テーブルの上に朝は無かった包みがあった。

「ん？」
丁寧にラッピングされた包みに、小さなカードが添えてある。

【アラストルへ】
と子供のようなたどたどしい文字が並んでいる。
「玻璃の仕業か…」
あいつも可愛いとこあるじゃねぇかなどと思いながら包みを開く。

「うわっ」
中から何かが飛び出してきた。
「…玩具の蛇？」
ガキかよとアラストルが呆れていると、笑い声が響く。
「ひっかかった」
「…無表情で言うな。って、こんなくだらねぇことしに来たのかぁ？」
確かに好きなときに来ていいとは言ったが悪戯を仕掛けても良い

とは一言も言っていないと彼は言う。
「驚いた？」
「ああ、驚いたよ。まさかこんな幼稚なことする奴が本当に居ることにな」
アラストルはため息を吐く。
「ジルと一緒に作ったんだよ」
「無駄に手の込んだことしてるな…」
「だって、アラストルいっつもつまらなそうな顔してるってリリムが言ってたから」
そう言う玻璃に、良く悪戯を仕掛けてきたリリアンの姿が重なる。
「そういやリリムとも仲が良いんだったな」
「別に…だってリリムは私のことといっつも『リリアン』って呼ぶもん。嫌い」
「そう言うな。あいつは記憶が無いんだから」
正確には記憶が持たないと彼は言う。
「知ってる。でも、時々頭を撫でてくれるのは嫌いじゃない」
リリムの手、柔らかくてあったかいんだよと玻璃が言うのを見てアラストルは微かに微笑む。
「良かったな」
「うん」
玻璃は身体ばかりが成長した子供なんじゃないかとアラストルは考えていた。
それはあながち間違いでは無いようだ。
子ども扱いされるのは嫌いなくせに、子供と同じ扱いであしらえる。

「あ、これ」
玻璃が新しい包みを差し出す。
「またびっくり箱か？」
「違う。えっと、なんだっけ…そう、プレゼント」

玻璃は『プレゼント』という単語を導き出すまでかなりの時間を掛けた。
おそらくは玻璃には縁の無い単語だったのだろう。
「ん？　何だよ」
「あけて」
玻璃に言われるまま、彼が箱を開く。
「…この時期にセーターかよ」
「お兄ちゃんにってリリアンが」
「はぁ？」
玻璃の言葉にアラストルはワケが分からないという顔をする。
「この前からよく夢に出てきて『お兄ちゃんにあげたいものがある』って言って、編みかけのそれがある場所を教えてくれた」
編みかけのそれとはセーターのことだろう。
「良く見つけれたな」
「うん。古い家。取り壊しの寸前だった」
その言葉にアラストルは頷く。
五年前に既に無人になったその建物はもう既に跡形も無いのだろう。
「編み物…したこと無かったからリリムに教えてもらって続きから作ったの…その…リリアンの場所と違って私の編んだ場所は下手だけど…取り合えず渡したから」
玻璃がかすかに恥ずかしそうなしぐさを見せたのでアラストルは驚いた。
こいつもこういうところがあったのかと。
「いや、良く出来てる。ありがとな」
そう、玻璃の頭を撫でると、玻璃は嬉しそうに笑う。
「あとね、朔夜に教えてもらって作ったケーキもあるの」
「…お前が作ったのか？」
玻璃の言葉に恐怖を覚える。
たしかこいつは炭化物しか生産できなかったはずだと。

「……いらないなら生ゴミに出しといて。お使いがあるから帰るわ」
「いや、冗談だ」
慌てて言うが、玻璃は既に窓を開いていた。
「窓から出るなといつも言ってるだろう」
「窓からのほうが近いから。スペード・J・Aにさっきのと同じびっくり箱を届けろってジルに言われたから」
「……止めとけ…殺されるぞ」
「平気よ。この顔では行かないから」
「はぁ？」
玻璃を見ると、かつらと化粧道具を手にしているようだった。
「姉の顔で行けば騙されると思う。昔よく入れ替わって遊んでたの。気付けたのはマスターと朔夜とシルバだけだったよ」
玻璃はそう言って笑うが、あの双子はもう既に全くと言っていいほど似ていないと彼は思った。
「玻璃、折角だからゆっくりしてけよ」
彼がそう言うと、玻璃は驚いたという表情をしてみせる。
「迷惑、じゃない？」
「ああ。折角だからお前の自信作、一緒に食うか？」
アラストルが笑いかけると、玻璃は嬉しそうに大きく頷く。

「昔ね、瑠璃と一緒にケーキ作ってシルバにあげたことあるんだ」
「ほぅ」
「でも、上手く出来なくてすっごく苦かった」
だろうなと思ったが、口には出さない。
それでも双子が料理が下手なことは考えなくてもよくわかる。
「でも、シルバは笑って『美味しいよ』って言ってくれたの」
「そりゃあ可愛い妹たちが作ったものなら何でも美味いと感じるさ」
アラストルが笑うと、玻璃は少し複雑そうな表情をする。

アラストルが覚悟を決めて、ケーキが入っているという箱を開けると、中には想像していたよりはずっとマシな、いや、それ以上に美味しそうなケーキが入っていた。
「生地がなかなか出来なくて五回も失敗しちゃった」
「いや、美味くできてるんじゃねぇか？　ってか無駄にデコレーションに凝ってるのはお前の仕業か？」
フルーツのトッピングとチョコレートのラインは一種の芸術だった。
「食品じゃなかったらもう少し綺麗に出来たと思う」
「そうか」
唯一残念なことは玻璃の文字が他のデコレーションにふさわしくないほど歪んでいることだろうか。
「あ」
「どうした？」
彼が訊ねると、玻璃は言い忘れていたことがあると言い出した。

「お兄ちゃん、お誕生日おめでとう」

玻璃が柔らかく笑って言うと、アラストルは固まった。

「リリアンからの伝言だよ？」
「あ、ああ…わざわざ悪いな」
「別に…私も嬉しいから」
アラストルは驚く。
「シルバの誕生日も一緒にお祝いできたみたい」
そう、嬉しそうに言う玻璃の頭を撫でる。

「今度お前の誕生日も祝ってやるよ」
「要らない。アラストルが時々遊んでくれればそれでいいから」
「ガキは大人の言うこと聞けよ」
「ガキじゃないもん、三十路」
「うっ…」
「オジサン、三十三歳」
「言うな！」
くすくすと笑い出す玻璃につられ、アラストルも笑う。
玻璃と一緒に、悪戯っ子な妹も笑っているような気がした。

宮廷騎士団の噂（前書き）

２０１０．０５．０５　ジル誕生日小説

貴方は私の所有物的な。

宮廷騎士団の噂

その日は珍しく晴れていて、宮廷騎士団長ユリウスことジルは上機嫌だった。

普段ならば絶対宮廷庭園で子供たちと遊んだりなんてしない彼が、むしろ子供たちを「邪魔者」とみなす彼が、珍しくも子供たちが遊んでいて飛んできたボールを投げ返してやる程機嫌が良かったのだ。

彼が上機嫌なことには理由がある。

第一に、今日はクレッシェンテには珍しい、雲一つない快晴なのだ。

第二に、いや、これが最も大きな理由であろう。

今日は珍しく、それこそ天変地異の前触れかと思わせるほど珍しく、瑠璃から今日を指定して会えないかと言ってきたのだ。

「よぅ！待たせたな」

何時も通り、脚を見せ過ぎだと言いたくなる程に短いショートパンツを穿いた瑠璃が手を挙げて挨拶をする。

その隣には普段の彼女には似つかわしくない大きなバスケットを持った玻璃が居た。

「来ちゃった」

「よく来たね。玻璃、部屋においでよ。適当に何か甘いものでも用意させるから。瑠璃はコーヒーで良いよね？」

「あ、ああ…」
瑠璃は驚いてジルを見た。
「どうかしたの？」
「いや、お前にしてはよく話すと思ってな」
「そう？　天気が良いからかな？」
ジルが笑う。
それを玻璃はじっと見ていた。
「ジル」
「何？」
「これ」
玻璃はそれ以上は言わずバスケットを渡す。
「なんだい？」
「受け取ってやれ。玻璃のやつ、昨日の晩から朔夜にどやされ、マスターを危うく殺しかけながらも頑張ったんだ」
瑠璃がそう言うのでジルはバスケットを見つめた。
正直、そのバスケットを開けるのにはかなりの勇気が必要だった。

「……パイ？」
「ああ、生地がなかなか焼けなくてな。ついでに玻璃は小麦粉と片栗粉を間違えたり塩と砂糖を間違えたり大変だったぞ？　挙げ句の果てに、火力が弱いとか言って火薬を持ち出して朔夜から愛の一撃を貰っていたな」
「へぇ、ありがとう、玻璃」
ジルがは玻璃の頭を撫でると玻璃は嬉しそうに目を細めた。

「急にどうしたんだい？」
彼は瑠璃に訊ねた。
「お前、誕生日だろ？　玻璃がいつも世話になってるから礼をした

いってさ」
「ふぅん、君と違って律義だね。玻璃は」
「悪かったな。律義じゃなくてさ」
「悪いとは言ってないよ。あ、そこの君、飲み物を持ってきてよ。コーヒーと、彼女にはココアを」
ジルは前が見えないほど山積みの書物を抱えた女性にそう指示し、再び瑠璃を見る。
「お前なぁ…彼女はいかにも忙しそうだっただろう？」
「気にしなくて良いよ。僕の部下にしては暇な方だから。いや、彼女は要領が良い。書類仕事を唯一まともにこなせる貴重な人材だ」
「なら尚更…」
「瑠璃、ペネルは働くのが好きなんだよ」
そう、玻璃が言うと、飲み物の乗ったトレイを持った彼女が追いついたようだった。
「珍しい、早かったね」
「ミカエラ看守官が玻璃様のお姿をご覧になられたようで飲み物をご用意してくださっていました」
「ふぅん、カァーネがねぇ」
ジルは少しばかり不服そうに言う。
「野心家のカァーネのことだ。毒でも入っているんじゃないかい？」
「流石にそれはないかと。玻璃様もいらっしゃることですし」
そう言う彼女に瑠璃は苦笑する。
「お前、ビアンコ・カァーネにまで気に入られて居るんだな」
「別に…嬉しくないもん。あの人苦手」
そう言いつつも、玻璃はカァーネの用意したココアに口を付ける。
「……美味しい」
驚いた表情で言う玻璃に瑠璃は豪快に笑った。
「良かったな、玻璃」
「アラストルの方が美味しく作ってくれるもん」

「変な対抗するなよ」
瑠璃が軽く小突くと玻璃は不機嫌そうに頬を膨らませる。
ペネルが礼をしてジルの部屋を出て行くと、ジルは黙って瑠璃を見つめた。
「なんだよ？」
「瑠璃は、祝ってくれないわけ？」
「お前な…２９にもなって誕生日祝われて楽しいか？三十路に片足突っ込んでるだろ」
「そう言う瑠璃だってすぐだよ」
「うるせぇ」
そう言って瑠璃は小さな箱を投げつける。
ジルは見事に片手で受け止めた。
「何？」
「ピアスだよ。作りすぎたからやる」
「へぇ、手作りなんだ」
「瑠璃はアクセサリー作るの好きなんだよ」
ね？　と玻璃は瑠璃を見上げると、瑠璃はふいと顔を逸らした。
「ほら、玻璃、帰るぞ。そろそろマスターの機嫌を損ねる」
「え？　もう？　まだジルと遊んでない」
「今日は遊びに来たんじゃないだろ？」
瑠璃は一気にコーヒーを飲み干して立ち上がる。
「……また来る」
それだけ言って瑠璃は窓から飛び出した。
「あ、瑠璃…ジル、またね」
「ああ」
玻璃もまた窓から外に出て、ジルに手を振ってそれから少し駆け足で瑠璃を追った。

その日、宮廷騎士団長ユリウスは、生まれて初めてピアスを開けた。

そして、看守官ミカエラに「似合わない」という一言を貰ったのにも関わらず、彼の機嫌は崩れなかったと、宮廷騎士団の中で怪談の如く語り継がれたことは言うまでも無い。

スリルを求めて（前書き）

２０１０．０６．０９　スペード・Ｊ・Ａ誕生日小説

スリルを求めて

「やぁスペード」
カトラスAことスペード・J・Aが久方ぶりに酒場に足を踏み入れると忌々しい声が聞こえたような気がした。

「珍しいですね、ウラーノ」
「そうでもないよ。最近はね。ナルチーゾも安泰だからね」
ウラーノ・ナルチーゾは笑う。
「ナルチーゾが安泰？」
「勿論、この私が治めているのだから」
くすくすと笑うウラーノは少しばかり酔っているような雰囲気だった。
「珍しい、貴方が僕やセシリオより先に酔うなど」
「たまにはそんな日もあるよ。さぁ、今日は飛び切り上等な酒を用意させた。スペード、君も楽しみたまえ」
「遠慮なく。貴方がここまで羽振りが良いとは……貿易で巧く騙せたのですか？」
「それもあるけど……今日は特別だからね」
「特別？」
スペードが訊ねるとウラーノは笑う。
「ああ、特別だよ。今日はセシリオも揃う。話はそれからにしよう」
スペードは気に喰わないと思った。

この空間に僕の知らない何かがある。
その事実がどこか許せないものに感じたのだ。

「おや、スペード、もう着いていたのですか」
親しげにそう言うのはセシリオ・アゲロ。
「セシリオ、もうとはどういう意味ですか？」
「ウラーノの招待でしょう？」
そう言ってセシリオは断りも無く二人の間に座って酒瓶の中身をグラスに注ぐ。
「今日は特別だからね」
「ええ」
ウラーノとセシリオが目配せするの見てスペードはますます訳がわからなくなった。

「それで？　何が特別なんですか？」
「何がって」
「忘れているのかい？」
「何を？」
彼は苛立った様子で訊ね返した。
「ふふっ、僕の勝ちですね、ウラーノ」
「くすっ、君には敵わないなぁ。化け物」
笑顔で暴言を吐くウラーノにセシリオは機嫌よさそうに笑った。
「何とでも言いなさい。今夜は特別です。なにせ僕の悪友の誕生日だ。で？　いくつになったんですか？　化け物」
「誕生日……ああ、今更歳を数えても仕方ないでしょうに。二百を過ぎてから数えるのをやめましたよ」
「本当に化け物だね。君たちは」
ウラーノは呆れたように言う。
「貴方だって化け物でしょう？　刺しても斬っても爆破しても死なないのですから」
「私にそんなことをするのはセシリオだけだよ」
彼は涼しい顔で笑う。

「全く、この国には化け物しか居ないのですか？」
「当たりでしょう？　なにせ闇の王の国です。普通の人間が居る筈無い。いや、いたところですぐに死にますよ。この国では」
二人は全く同感だと頷く。

「誕生日を祝ってくれるのはありがたいのですが……祝いの席に男ばかりと言うのはどうでしょう？」
「何です？　また悪い癖でも出ましたか？」
おどけて訊ねるセシリオにスペードはハハンと笑う。
「どうせ祝ってくださるのでしたらビアンコ・カァーネでも呼んで下さい」
「ビアンコ・カァーネ？　ああ、ミカエラのことですか」
「ご存知なんですか？」
「ええ、うちの娘がたまに話すんですよ。もっとも、彼女のことは嫌いだといっていましたが」
二人揃ってとセシリオが告げればウラーノだけが理解できないと言う顔をする。
「そのビアンコ・カァーネって言うのは噂の看守かい？　随分若く出世したって宮廷騎士団長ユリウスと並んで噂の」
「ええ、尤も彼女はあんな男とは違って美人です。それに頭も悪くない。少々勝ち気過ぎる気もしますがそこもまた魅力的です」
「恋、かな？」
「恋、ですか？」
からかう気満々といった空気を醸し出す二人をスペードは鼻で笑って一蹴した。
「貴方達はそんな低俗な話しか出来ないのですか？」
「いや、君が女性を魅力的だなんていうからね」
「そういう台詞は詐欺の最中だけかと思いました」
「僕だってたまには人を誉めますよ。彼女をからかうのはまさに命懸け。その絶妙なスリルを楽しみたい」

スペードはうっとりとした様子でそう言う。

「変態だ」

「変態ですね」

「何とでも言いなさい。ところでセシリオはどう祝ってくれるのですか？」

ウラーノは良い酒を用意してくれましたと告げるとセシリオは笑う。

「取って置きを用意してありますから安心してください。おっと、僕はそろそろ失礼します。これから仕事なんです」

「珍しい。君が自ら動くほどの仕事かい？」

「いえ、でも、僕の可愛い奥さんの頼みですから断れませんでした」

そう言ってセシリオは酒場を後にする。

「あ、また私に勘定を押し付けたね。まぁ、構わないが……」

「あれから回収するのは骨が折れます。なにせがめつさもクレッシェンテ1ですからね。あの男は」

「ああ」

ウラーノが溜息をついたと同時に酒場の扉が勢いよく開けられた。

「スペード・J・A、君を逮捕するよ」

宮廷騎士団長ユリウスが手錠を構えてスペードに歩み寄る。

「まさか、とは思いますが、セシリオの言っていた取って置きとは……」

「彼のことだろうね。まぁ貴重なんじゃないかい？　宮廷騎士団長ユリウス殿じきじきにいらっしゃるとは」

「誰がユリウスだって？　僕のことはジルって呼びなよ」

「噂通りの方だ」
ウラーノは溜息を吐いた。

「まぁ、これはこれで楽しめそうですね」
「君にそんな余裕あるの？」
スペードが立ち上がると、ジルは後ろに着く。
「僕もこれで失礼します。勘定はお願いしますよ」
「ああ、構わないよ。楽しんでおいで」
「さて、ミカエラほどには楽しめなさそうですが……生と死の境界線を味わってくることにしましょう」
そう言ったかと思うとゆらりとスペードは消えた。
「なに？」
追うように慌てて酒場を出るジル。

その様子をウラーノ・ナルチーゾただ一人が楽しそうに見つめていた。

退屈（前書き）

２０１１．０１．０２（ウラーノ誕生日小説）
現ブログからの移転

退屈

クレッシェンテ王都ムゲットから少しばかり北に外れた地ナルチーゾ。
ここを治めるはナルチーゾ伯だった。

ナルチーゾ伯爵邸は美しく豊かな薔薇園に囲まれた古城、この古城はステーラと呼ばれている。
中には絢爛豪華な調度品に美しい召使い達がおり、全てが麗しい城主、ウラーノ・ナルチーゾ伯のもの。そう、城下では囁かれている。
彼は大変民から慕われる城主であり彼もまた、ナルチーゾを愛してる。
そんなナルチーゾの特産品は葡萄と薔薇、それに伴いワインと香水は他国にも知れ渡る素晴らしいものが作られる土地だ。

一見、悩み事など無いように思われるナルチーゾ伯だが、彼には深刻な、彼にとっては深刻な悩みがあった。

「ああ、退屈だ……」
思えばもう一週間も誰とも会話を交わしていない。
ウラーノは深い溜め息を吐いた。
特に客人も来ないこの地で、使用人たちも姿を見せない。彼らは姿さえ見せずにただ黙々と仕事をこなしている。
それに不満は無い。だが、どことなく寂しさを感じる。

「セシリオもスペードも顔を見せないなんて薄情な奴らだ。仕方ない。私から呼び出そう」
ウラーノはダイヤルを回す。
最近発明されたばかりの魔動式電話機はまさに科学と魔術の融合とも言える品だ。
中に入っている魔女の石が動力源なのだ。いかにもクレッシェンテらしい品だ。

「スペード、退屈だよ」
『知りませんよ、そんなこと』
「薄情だね」
『僕は忙しい』
「友人が退屈で死にそうだと言うときにそんなことを言うのかい？」
『なら死になさい』
電話は切られた。

「全く、薄情な奴だ。こうなったらセシリオだね」
再び電話を回す。

『誰？』
電話越しの声は予想していた男のものではなく、幼さを感じる少女の声だった。
「ウラーノと申します。セシリオはいるかな？」
『マスター？　マスターはいないよ』
「そう、なら君でもいいや。名前をお訊ねしても？」
『オタズネ？』
「あー、名前を訊いてもいいかな？」
『玻璃』
少女は静かに答える。
「退屈なんだ。少し相手をしてくれないかな？」

『なに？』
「なんでもいいよ」
どうやら彼女も乗り気のようだ。
恐らくは退屈していたのだろう。
「ナルチーゾに来てくれないかな？」
交通費はあとであげるよと告げれば彼女はうんと頷いた様子で電話を切った。

砂時計を三回程ひっくり返した頃、伯爵が待ちわびていた客人が来た。

「来たよ」
「いらっしゃい」
ナルチーゾ伯は上機嫌で玻璃を出迎えた。
「で？　何をするの？」
「お茶でもどうかな？　君はコーヒー派？　それとも紅茶かな？」
好きなのを用意するよと告げれば、彼女はココアと答える。
仕方ないので彼はメイドにココアと紅茶と茶菓子を頼むことにした。

「君はセシリオのところで何をしてるの？」
「仕事」
「何の仕事かな？」
ウラーノは完全に子供に話しかけるような玻璃に話しかける。
玻璃は少しムッとした様子で答える。
「主に殺し」
「へぇ、人は見かけによらないね」

ウラーノは少しだけ驚いていた。
てっきりメイドか何かだと思っていたが、そういえばセシリオはメイドを雇わない程には用心深い男だったと思い出す。
「今日は休み？」
「うん」
「普段は何してるの？」
「絵を描いているわ」
「へぇ、何を描くんだい？」
「なんでも」
ウラーノは表情の変わらない玻璃をじっと見ていた。
出会ったばかりの頃のセシリオに似ていると感じた。
「今度私の肖像画を描いて貰えないかな？」
「いいよ」
ウラーノは出会ったばかりのこの少女をもっと知りたいと思った。
声なく、気配もなく、いつの間にかテーブルにカップと皿が並べられている。
「何？」
玻璃は警戒した様子で辺りを見回した。
「うちの使用人はみんなシャイなんだよ。仕事は優秀だから安心してくれ」
「……落ち着かない」
玻璃の言葉に彼は笑う。
「セシリオと同じことを言うね」
「えっ？」
「私の友人たちは使用人達が気配を消すのが落ち着かないと言ってなかなかここに寄り付かない」
ウラーノが言うと玻璃は納得したように頷く。
「どうして気配を消すの？」
「お客様に気を使ってるんじゃないかな？　まぁ私も執事以外の顔

を見たことがないのだけどね」
彼は豪快に笑った。
「むしろ客人を不快にすると思う」
「そう？　だけど、退職させようにも姿が見えないからねぇ」
ウラーノにはどうでもいいことだ。
「美味しい」
唐突に玻璃が言う。
「それは良かった。ナルチーゾ自慢の蜂蜜を使ってるんだ」
「蜂蜜？」
「まだムゲットには出荷してないがナルチーゾじゃちょっとした名物だ」
「ふぅん」
「良かったら持って行くかい？」
「いいの？」
途端に玻璃は目を輝かせる。
「じゃあ土産に包ませよう」
うまくいけば次はセシリオも来るかもしれないと彼は期待していた。
たまには友人の顔が見たい。だけどもあまり領土を空けるわけにもいかないのだ。

「ねぇ」
「なんだい？」
「今度、他の人連れてきても良い？」
「他の人？」
ウラーノはしめたと思ったことを必死に隠しながら訊ねる。
「アラストルと一緒に」
「アラストル？」
どこかで聞いたことのある名だったが期待はずれだ。
「アラストル・マングスタ」

「ああ」
思い出した。たしか剣士だった。ここらじゃ名のしれた彼かとウラーノは考える。
「丁度一度会ってみたいと思っていたんだ。大歓迎だよ」
本当はそれほど興味は無いが、この退屈な地に客人が来ると思えばそれだけで満足だ。
「アラストルはナルチーゾ出身なんだよ」
「ああ、それで？」
「凄くいい人」
「ナルチーゾ出身に悪いヤツなんていないさ」
クレッシェンテらしからぬ表現をナルチーゾ伯は自信たっぷりに口に出す。
「あなたのことだったのね」
「何が？」
「ナルチーゾ」
「ああ、ナルチーゾさ」
ナルチーゾは酷い自惚れ屋のことを指すとセシリオ・アゲロに教えられていた玻璃は、彼がその語源となった人物ではないかと確信した。

「ウラーノ」
突然声が響いた。
「やぁ、セシリオ」
「僕の可愛い娘を誘拐とは良い度胸ですね」
「誘拐とは人聞き悪い。玻璃は自主的に来てくれたんだ。ねぇ？玻璃」
「うん」
玻璃は静かに頷いた。
「遊びにおいでって」
「玻璃、知らない人に誘われても言ってはいけないと言いませんで

したか？」
「もう知らない人じゃないさ。ねぇ、玻璃？」
「うん」
セシリオは深い溜息を吐いた。
「帰りますよ。仕事です」
「はい」
玻璃は立ち上がる。
「あ、蜂蜜……」
玻璃は一度ウラーノを見た。
「ああ、持って行きなよ」
いつの間にかテーブルに用意された蜂蜜。
「ありがとう」
「いや、構わないよ。またいつでもおいで」
「うん」
嬉しそうに笑う玻璃に、セシリオは溜息を吐いた。
「もういいでしょう？　今日は忙しいですよ」
「大丈夫。瑠璃は？」
「もう他の任務に出ています。朔夜もです。さぁ、玻璃、これからオルテーンシアに行きますよ」
「はい。ウラーノ、またね」
「ああ、また。セシリオもたまには遊びにおいでよ」
ウラーノはセシリオを引き止める。
「僕は、貴方とは違って忙しいんです」
そう言って、セシリオは玻璃の手を引いて城を後にした。

「つれないな」
ウラーノは呟く。
「ねぇ、誰か居ないの？　凄く、退屈だよ」

返事は無い。

また、広すぎるステーラで、一人過ごす日々が始まる。
長すぎる退屈に、ウラーノは自分の生を呪いたくなった。

一生に一度きり（前書き）

２０１１．０３．１３（アラストル誕生日小説）

一生に一度きり

今日と言う日は一度きりしか来ないとは言うが、何故毎日が同じ繰り返しでしかないのだろう。
そう、思っていた。
だが、そうではないのかもしれないと思えるのは、あいつが顔を出すからだろう。

「……で？　何故俺のベッドの下にお前が居るんだ？」
見つかりたくないものを隠す場所上位に女が居れば死体か何かではないかと思われるのではないかなどと考えながら、ベッドの下の玻璃を引きずり出す。
「居心地が良かったのに」
「暗くて狭くて硬いところが？」
「うん」
半分くらい引きずり出したところで、玻璃は何かを蹴飛ばして這い出て来た。
「おい、今何蹴った？」
ベッドの下はこいつが隠れるから何も置いていなかったはずだ。
「あ、忘れてた」
「なんだよ」
「マスターからのプレゼント」
玻璃がそう言ったかと思うと顔面に勢い欲甘ったるい匂いのするべたつく何かをぶつけられた。
「……てっめぇ……いきなり何しやがる！」
「マスターが全力で顔面にぶつけるのがハデス流の祝い方だからそうしてあげなさいって」

「は？」
一体どこでそんな間違った知識を仕入れたんだ？
いや、確実に嫌がらせだろうが。
「アラストル、お誕生日でしょう？」
「だからと言ってティラミスを人の顔にぶつけるな」
傍にあった布を拾い上げ顔を拭く。
最悪なことにそれは毛布だった。
「あー……洗濯屋に持っていかねぇとな……」
あのセシリオ・アゲロと言う男はどうしても地味な嫌がらせをしたいらしい。
近頃はルシファーのところにも顔を出すということを聞いたような聞かないような。
「あ、ルシファーにありがとうって言っておいて」
「何が？」
「マスターがこの前お土産持ってきたの。ルシファーからって。苺みたいに真っ赤な石」
「……それ、ルシファーが無いと騒いでたルビーじゃねぇか？」
やっぱりあいつの仕業か。
「お前のとこのマスターに二度と来るなと伝えてくれ。来る度に金目のものが消えていくんだよ」
迷惑な奴だ。
溜息が出る。
「綺麗だったよ」
「だろうな。リリムに指輪にでもして贈ろうと考えていた入手したばかりの最上の石だからな。お蔭でうちのアジトの前を通った一般人が十人ほど炭になった」
歩く公害どもめ。
「これ、瑠璃から」
「ん？」
「呪われた剣。剣士にはぴったりって」

入手ルートがすげぇ気になる。
「持った奴が全員死ぬだか、どんなに拭っても綺麗にならないとかいう剣だろう？」
「うん。アラストルにって」
「いらねぇ。むしろ捨てろ」
なんでこいつは持ってて平気なんだよ。
「お前は呪詛向こうとかそういうのがあるのか？」
「存在自体が呪詛だから」
「は？」
「呪詛から生まれたから」
これは日ノ本ジョークか？
日ノ本人は良くわからないことを言う。
「笑うポイントはどこだ？」
「そんなの無い」
「は？」
「場の空気をぶち壊す」
理解できない。
「で、朔夜からはこれ」
「……今度は呪いの盾とかいわねぇよな？」
恐る恐る包みを解く。
そういえば、瑠璃は梱包さえしていなかった。
「……絵本？」
タイトルは『クレッシェンテ名作集』。
「思いっきり子供向け絵本じゃねぇか……」
ダメだ。
ディアーナの連中は地味な嫌がらせをしたくてうずうずしているらしい。
「あとね、アンバーとジャスパーからも預かってるよ」
そう言って渡されたのは食虫植物といかにも毒々しい料理だった。
「……もうねぇよな？」

「あるよ」
絶望的だ。
次に何かを開けたら毒ガスが発生するか爆発でも起きるのではないかと思う。
「私からはこれ」
「ん？」
可愛らしくリボンを付けられた外見に惑わされてはいけないと思いつつも開く。
一枚の絵。
「……リリアン？」
「この時期になると毎日夢に出てくる」
玻璃は少しだけ不機嫌そうにそう言う。
「シルバは来てくれないのにリリアンばっかり来る」
もう、忘れかけていたかもしれない妹の顔が鮮明に描かれている。
「お前、クレッシェンテ一の天才画家だよ」
「殺し屋よ？」
「画家のほうが上手くやっていける」
「そうかしら？」
玻璃はどうでもよさそうに窓の外を見た。
「シルバの顔、もう思い出せないの」
「……ああ」
「ずっとアラストルに似てるって思ってた」
「ああ」
「なんだか、思い出せるのはアラストルの顔ばかりで、シルバの顔、ちゃんと思い出せないって思い始めた」
それは似すぎているせいなのか、記憶が薄れているからなのか……。
「お前の描いたリリアンを見れば、本当にお前とリリアンは良く似ていると思う。けど、雰囲気が違う」
「それは私もそう思う」

「ほぅ」
「シルバはね、いたずらっ子の顔でマスターにも悪戯仕掛けてたから」
怖いもの知らずの奴だ。
「リリアンはお前よりは器用だった」
「……殺しより繊細な作業は出来ないの」
不機嫌そうに玻璃は言う。
「言い忘れていたわ」
「難だ？」
「お誕生日、おめでとう。だったかしら？　リリアンが」
「ああ。ありがとう」
もう、会えない。
そう思っていた妹に、もう一度会えた気がする。
けれど、それは結局は幻影。
今日と言う日は二度と来ないように、目の前の玻璃がリリアンに変わることは無い。
「玻璃、飯食って行くか？」
「うん」
「相変わらず遠慮がねぇやつだな」
「アラストルのご飯美味しいから好き」
「ん、そうか？」
「うん。マスターみたいに毒を混ぜないもの」
そう言う玻璃に思わず溜息が出た。
「毎日じゃないの。抜き打ちで毒が混ざったのが来るの。食器が変色する前に気付かなかったらその日はご飯がもらえないの」
どんな修行法だよと呆れずには居られない。
「お前の部下とかはどうなんだ？」
「弱い毒を飲まされたりする。だって、慣れないと大変でしょう？」
「つくづくディアーナに行かなくて良かったと思うぜ」
身寄りの無い子供ばかりが集まるというディアーナは歪んだ人間

ばかりがそろっているような気がしてならない。
「アラストルはハデスに居るのが良いと思うの？」
「ああ」
「ふぅん」
玻璃はどうでもよさそうな返事をする。
「でも、私はマスターに出会えて幸せ。だって、マスターが居なかったらきっとアラストルには出会えなかった」
「……まぁ、そうだな」
全ては必然とでもいうのだろう。
「俺も、ナルチーゾ生まれでよかった」
「どうして？」
「ナルチーゾに生まれていなければルシファーには出会わなかったし、剣士でも無かった」
人間と言うのは生まれた時から既に人生が決まっているのかもしれない。
なんて思えるから不思議だ。
「前にね、蘭が言ってた」
「ん？」
「出会った全ての人が運命の人なんだって。だから、アラストルも私の運命の人」
玻璃はどこか嬉しそうに笑った。
「まぁ、否定は出来ないな」
運命の人なんて言い方は大げさかもしれないが、確かに玻璃は『運命の人』だ。
「繰り返すばかりの退屈な人生を変えたって意味では運命かもな」
「難しいと解らない」
「ほぅ？　お前が言い出したんだろう」
「アラストルは直ぐに難しくする。もっと簡単に考えないと」
そう言って玻璃は考え込む。
まだまだ子供だ。

だが、こいつが居るから人生に変化があるのだと思うと、今日くらいは少し手の込んだものを作ってやってもいい気がして、いつもより少しばかり気合が入った。

手紙

もしも、過去に手紙を出せるなら、シルバにありがとうって伝えたいな。

そんなことを蘭に話したら、あっさりと「できるわよ」と言われてしまった。

「それ、本当？」
「時の魔女に不可能は無いわ。対価しだいでなんだって引き受けるわよ？」
「対価は？」
訊ねると蘭はくすくすと笑う。
「ケーキワンホール」
「え？」
「丁度甘いものが欲しいの」
蘭は楽しそうに言う。
「朔夜に頼んでみる」
「まぁ。じゃあ、手紙が書けたらいらっしゃい」
蘭はそう言って飲んでいた紅茶のカップを片付け始める。
「すぐ来るから」
慌てて蘭の店を飛び出してアジトへ走る。

途中で便箋が無かったことを思い出してお店に寄って、シルバな

らどんなのを選ぶのだろうかって考えてたら、前にアラストルの部屋にあったようなのと同じようなものを選んでしまった。

「朔夜！」
アジトへ戻って真っ先に朔夜を探す。
「玻璃、そんなに慌ててどうしましたか？」
部屋に居たのは朔夜じゃなくてマスターだった。
「朔夜にケーキ焼いてもらおうと思って」
「ケーキ？　たまにはいいですね」
「食べるんじゃなくて持ってくの」
「持っていく？　どこへ？」
「蘭のところ」
蘭という名を聞いた瞬間マスターは嫌そうな表情をする。
そういえばマスターは蘭が嫌いだった。

「シルバにね、手紙を書くの」
「アルジェンテに？　彼に手紙を出すことは不可能だ」
「時の魔女に不可能は無い」
そう告げればマスターは本当に忌々しいと言わんばかりの表情。
「シルバにね、ちゃんとありがとうって伝えたいんだ」

そうして、今、ちゃんと幸せだって。

「それと僕の可愛い朔夜の焼くケーキに何の関係が？」
「対価。蘭がケーキ食べたいんだって」
手紙を出してあげる代わりにケーキを要求されたとマスターに言えばマスターは深い溜息を吐く。
そんなマスターを無視して慌てて部屋に飛び込んだ。

久しぶりの自分の部屋。
ぷうんっと絵の具の臭いがする。
描きかけのまま放っておいたカンバスは既に乾いて、パレットも筆もとても使えそうに無い。
何を描いていたのかどうして放り出したのかももう思い出せないその画材をえいっと端に蹴飛ばして、引き出しからペンとインクを取り出す。
「あっ」
いざ書こうとして思い出す。
慌ててインクとペンと便箋を持ってマスターの所に駆ける。

「マスター」
「今度は何です？」
少し呆れた表情のマスター。
「字、教えてくれる？」
「……仕方ありませんね。何を書きたいのです？」
呆れつつも、ちゃんと紙とペンを用意して隣の席に座るように促してくれる。
マスターがマスターで良かったって心から思った。

「できた」
「玻璃、文字くらい覚えてください」
「うん」
アラストルにもいっつも文字を教えてもらうけど、やっぱり文字は苦手。
蚯蚓の這い蹲ったような文字になってしまうし、綴りが良く解らない。
「自分の名前を書けるのが奇跡的ですね」
「アラストルの名前も覚えたよ。あと瑠璃と朔夜の名前も書ける」

そう言って別の紙に得意気に三人の名前を書くとマスターは溜息を吐く。
「どうせなら僕の名前も覚えてください」
「だってアラストルは教えてくれないもん」
本来は口に出すのも良くないってアラストルは言う。
「それはそうだ」
マスターは豪快に笑った。
「笑い事かしら？」
「朔夜」
「セシリオ、貴方、未来の息子に既に嫌われているってことよ？それでいいのかしら？」
朔夜が良く解らないことを言う。
「待ってください。僕はまだ認めていませんよ」
「あら、認めてあげたら？　ねぇ、玻璃ちゃん？」
朔夜の言葉に首を傾げる。
全く理解できない。
「それ、貴女は義母で義姉という微妙な立場になりますよ？」
「まぁ、それは仕方ないわ。セシリオがそう仕組んだのだもの」
朔夜はくすくすと笑う。
「ケーキ、用意できたわよ」
「ありがとう」
「早く行かないと、あの人気まぐれだから居なくなっちゃうわ」
「急がなきゃ」
朔夜からケーキを受け取って、手紙を封筒に仕舞って蘭の元へ急ぐ。

「蘭！」
「あら、早かったわね」
「うん」
少し息が苦しい。

でも、それ以上に楽しみで。
「これ、お願い」
「任せて」
蘭に手紙を渡せば、蘭は戸棚にそれを入れた。
「返信は、女神像の裏にあるわ」
「え？」
「ふふっ、あの子、隠すの好きだから」
蘭は笑う。
「ケーキはありがたく頂くわ」
お茶はいかがと誘われたけれど、断って、急いでアジトに戻る。
女神像の裏と言うことは祭壇の裏だ。

「マスター、ごめんなさい」
ばれなきゃ良いけれど、ばれたらお説教だ。そう思いながらも女神様を動かせば、猫の絵の描かれた封筒が出てきた。
「……これ？」
文字が書かれているけれど、読めない。
「玻璃？　祭壇で何をしているんですか？」
どうやらマスターに気付かれたらしい。
「これ」
「ん？　ああ、アルジェントの。見つけてしまったんですね」
マスターは溜息を吐く。
「貴女宛ですよ」
「……ホント？　でも……」
「ああ、文字が読めないのでしたね。読んであげますから下りましょう」
マスターはここに長居をさせたくないと言っている。
大人しく従う。手紙のためにも。

ありがとう。
素敵な女性になりなさい。

シルバの言葉はいつだって優しい。
思わず涙が流れたのは、目の前にシルバが居て、頭を撫でてくれるようなそんな感覚があったから。
けれども、マスターは不思議そうに首を傾げて「困った子ですね」と背中をさすってくれる。

俺も玻璃が大好きだよ。

その言葉が何より嬉しかった。

母に捧ぐ誓い（前書き）

（２０１１．０９．１４）アルジズ誕生日短編

母に捧ぐ誓い

「アルジズ」
「おや？　珍しいですね。どうしましたか？　マスター」

大聖堂の地下、研究室にマスターセシリオが来るのは久方ぶりだ。
大聖堂にさえ、滅多に来ないこのお方は何かをたくらんでいるような笑みを浮かべている。

「一年で一番不幸な日ですから、慰めてあげようかと思いまして」
言葉と同時に、顔面を目掛けて何かが飛んでくる。
ぐちゃりと嫌な音と衝撃。
……またか。
溜息が出る。
「……二百年来変わらずありがとうございます」
「いえ、僕にとって、年に一度の楽しみですから」
顔面にぶつけられたのはケーキ。
しかもこの方は、このためだけにケーキを作ってくださった。
全く。無駄が好きな方だ。
あらかじめ用意されていた手ぬぐいを受け取り顔を拭く。
「それで？　いくつになったんです？　化け物」
「貴方程ではありませんよ。今年で２３７になります」
「よく数えていますね」
「騎士団を抜けてからの年月を数えれば分かります」
今となっては昔のことだ。
「騎士団時代は貴方も相当やんちゃでしたね」
「恥ずかしながら。マスターには大変なご迷惑をお掛けしたと。それに、昔から貴方にはお世話になっています」
「いえ。僕も、優秀な同志を持てて嬉しいんですよ。貴方は僕の部

下ではない。同志です」
「マスター」
「セシリオ、で構いませんよ。何度も言いますが、貴方は僕の部下ではないのですから」
これはこのお方の優しさだ。
「もう、上に縛られる生き方は嫌でしょう？」
悪戯っぽい笑み。
「そう、ですね」
けれども、貴方の下で尽くすのなら、悪くないように思える。
「私はこの女神に忠誠を誓います。幼き女王ではなく、全能なる我らが母、月の女神に忠誠を」
「……この２０年ほどで貴方は随分変わった」
「そう、かもしれませんね。貴方の影響は大きい」
そうして、私は感謝しても足りないほど、この方に大きすぎる恩がある。
「僕は、何もしていませんよ」
「貴方が、私に信仰を下さった」
そして、この大聖堂を任せてくださった。新たなる役割を。
「それは、母のご意思です。僕の意思ではない」
我らが母のお声を聴くことの出来るただ一人のお方。
マスターセシリオ。
「ベルカナは元気ですか？」
「ええ、元気すぎるほど。昔では考えられません」
「あの子は何時までたっても幼いまま。永遠の子供ですね」
マスターは微かに溜息を吐く。
「時折、玻璃もああなればよかったと思いますよ」
「玻璃が？」
「幼いままのほうが彼女にとってもよかったのではないでしょうかねぇ？」
マスターは普段は見せないほどのんびりと言う。

「貴方の三人の娘は変わりありませんか？」
「どうせ朔夜に毎日聞かされているのでしょう？」
「ええ、また瑠璃が戻らないようですね」
人懐っこいしっかりものの朔夜と放浪癖のあるやんちゃな瑠璃、人見知りの激しい悪戯っ子の玻璃。あの三姉妹は見ていて楽しい。
「朔夜は近頃随分悲観的ですが、それでも以前よりは大分落ち着きましたよ」
「そうですか。ところで……」
「はい？」
「ケーキの味は如何でしたか？」
大真面目に彼は訊ねる。
「そうですね。毎年のことながら、私には縁の無いものの象徴のような味でしたよ」
そう告げれば彼は笑う。
最下層からのし上がって騎士団に入ってかなりの高給取りだった。何でも手に入る場所にいて、何も求めなくなった。
「マスター」
「貴方にそう呼ばれるとくすぐったい」
「貴方に出会ったのも今日でしたね」
「ええ、それが貴方の不幸です」
「いいえ、貴方のおかげで私は生きている」
そう、この方に会う前の私は死んでいた。
何も求めないただの死に向かう人形。
「私は朔夜が羨ましい」
「何故です？」
「貴方の家族でありながら、貴方の部下でいられるからです。私は、同志よりも部下になりたかった」
結局私は主を求めるのだ。
「貴方には既に主があるでしょう？」
「……ええ」

そう、私に最高の主を与えてくださったのだ。
全能なる母を。
「マスターセシリオ。貴方に感謝を。そして、我らが母に感謝を」
今日この日こそ私の死んで生まれた日なのだ。
そして、新たに誓う日でもある。
生涯、この方に忠誠を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3098w/

クレッシェンテ短編集

2011年10月3日03時28分発行